時空の波涛・外伝 －欧州に翔きし姉妹－

ELYSION

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時空の波涛・外伝　－欧州に翔きし姉妹－

【Ｎコード】
Ｎ４４９２Ｎ

【作者名】
ＥＬＹＳＩＯＮ

【あらすじ】
１９１４年第一次世界大戦勃発。大日本帝国は同盟を結んでいたイギリスからの要請により、河内級戦艦二隻を中心とする艦隊を編成。欧州へと派遣する。
この物語は河内級戦艦の艦魂姉妹を中心に、外国戦艦との確執、やがて迎えるジュットランド海戦、数奇な運命の戦艦エジンコートとの出会い等を描いていきたいと思っています。
初めての艦魂作品となります。どうぞ宜しくお願いします。

第1話　出航（前書き）

タイトルにもあります通り、この作品は当方のサイトで連載中の「時空の波涛ＥＸ」を補完する目的で執筆するものです。しかし、この作品だけ読んでも解る様に心掛けます。

第1話　出航

１９１５年２月１７日　呉軍港。
軍艦行進曲が高らかに鳴らされる中、二隻の軍艦が出航の時を迎えていた。
接岸する埠頭では、見送る者と見送られる者が隊列を組み、壮行会といった趣きの行事が
盛大に執り行われている。
一方、二隻中の一隻の後部甲板でも、別の一団がこちらは極く少人数でひっそりと、
やはり壮行会が執り行れている最中だった。
その者たちはいずれも、埠頭の連中と同じく濃紺の海軍第一種軍装を身に纏っていたが、
不思議な事に顔立ちや体躯は十代後半の少女にしか見えなかった。

「それでは行って参ります。我々が欧州へ派遣の間、皇国の守護を宜しくお願いします」

そう言って敬礼する少女は黒く長く伸びた髪を持ち、

「お任せ下さい、河内殿。そして摂津殿。大日本帝国が誇れる武功を期待しております」

と、返礼する少女は、いくらか長身でウェーブのかかった金髪をしていた。

「お姉ちゃんも金剛も、な～に気取っちゃっているのよ。
大丈夫だって。ちゃんとがんばってやってくるから！　だから金剛も比叡も留守番お願いね！」

二人に割って入った彼女は、黒髪の少女と良く似た顔立ちをしている。
ただし、同じ黒髪でもこちらはクセっ毛が多数で、服装もどことなくだらしない。

「こら摂津！　大事な行事に茶々入れない！」
「だって、私たちの姿は誰にも見えないんだよ。どうやろうと勝手じゃん」
「たとえそうであっても、私たちとて帝国海軍のはしくれ。節度ある態度をとってもらわないと
困ります。ましてや私たちは、海軍創設以来師と仰いできた英国に向かうのです。
その地で帝国の恥となる様な行為を・・・」

そこに、手をパンパンと打ち、微笑みながら別の少女が割って入る。
こちらは金髪の少女と良く似た顔付きだが、髪の色は黒く、後で束ねてポニーテールにしている。

「はいはい、姉妹喧嘩はそれまでにしましょう。
河内殿、妹の摂津殿とて立派な海軍軍人。そのあたりの事情は充分わきまえられているはずです。
私や姉の金剛に代わっての任務の遂行、よろしくお願い致します」
「比叡の言う通りです。本来なら私どもが行かねばならないところなのですが・・・」
「駄目だよ。金剛も比叡も最新最強の巡洋戦艦なんだよ。
いくら英国の頼みだからって、おめおめと行かせられますかって。
だから私やお姉ちゃんが代わりに行くの！」
「その通りです。金剛殿も比叡殿もこれからの帝国になくてはならない艦材（ひと）です。

万が一の事もあってはなりません。欧州派遣の任は私たちにお任せ下さい」

金髪側の姉妹は、もう一組の姉妹の歩調が合ってきたのに安堵し、

「帝国の守りはお任せ下さい。私たち姉妹の他、まもなく竣工する二人の妹、榛名と霧島、

更には多くの先輩方と共に立派に務めてまいります」

「御二人が欧州に行かれれば、私の故郷を見る機会もありましょう。どの様な国なのか確かめてきてください」

「そうだね。金剛が生まれた国だものね。今から楽しみだよ。ねえ、英国ってどんな国なの？」

「ほらほら攝津、私たちは親善航海に行くのではありませんよ。その様な浮かれた気分では・・・」

彼女は能天気な妹に呆れた。そんな彼女を見て、金髪の少女は微笑みながら話を続ける。

「さあ？　私も竣工して間もなくこの大日本帝国に参りましたから、詳しい事は知らないのですよ。

御二人には私の分まで見てきていただき、土産話に聞かせて下されば嬉しいです。

それから、故郷には私も見た事の無いもう一人の妹がいるはずです」

「へえ～、金剛には比叡や榛名、霧島以外にも妹がいるんだ。何て名前なの？」

「たしか『タイガー』といったはずです」

「ふ～ん、タイガー、虎さんかあ・・・　うん、会ったら宜しく言っておくよ」

四人の話が尽きない中、埠頭でも動きがあった。

「壮行会が終わって乗艦が始まったみたいよ。摂津、私たちも仕度しないと。
金剛殿、比叡殿、後は宜しくお願いします」
「はい、御武功を！」

四人の少女はもう一度敬礼を交わすと、その身は光に包まれ消え去った。

古来より人の作りし舟には魂が宿るという。
その魂は例外無く乙女と言っても良いうら若き女性の姿を模し、
作りし舟が加速度的に巨大化した今、艦魂と呼ばれていた。
河内と攝津、金剛と比叡は、同じ名を持つ戦艦の艦魂姉妹なのであった。
その姿は、余程に波長の合った極く僅かな人間にしか見えない。
そんな貴重な人間が、乗艦する士官の中にあった。
後に機動部隊の重鎮として名を成す海軍提督、山口多聞その人である。
もっとも当時の彼は、一介の少尉に過ぎなかったのだが。

第1話　出航（後書き）

欧州派遣艦隊に参加した後の有名提督は、山口多聞以外にも居たはずですが、
失念してしまったので、艦魂が見えるのは彼だけとします。

第2話　見えるの？

戦艦「扶桑」の艤装員長に任ぜられるはずだった佐藤皐蔵大佐を、急遽少将に昇格の上、
遺欧艦隊司令長官に据えた戦艦「河内」および「摂津」は、呉を出港後、第１１駆逐隊の四隻の駆逐艦
「杉」「柏」「松」「榊」を従え佐世保を出港した防護巡洋艦「矢矧」と合流。まずはシンガポールを目指す。

「第１１駆逐隊を率います矢矧です。シンガポールまでですが、護衛を勤めさせていただきます」
「よろしくお願いします」

艦魂の矢矧は、河内と攝津に手短に挨拶を済ますと、直ちに自分の艦へと戻っていった。

３月１日、シンガポールに到着。
ここで「矢矧」は、先発していた防護巡洋艦「明石」とバトンタッチ。
「明石」は既に第１０駆逐隊の四隻の駆逐艦「梅」「楠」「桂」「楓」を率いていたので、
遺欧艦隊の規模は戦艦２、防護巡洋艦１、駆逐艦８となった。
３月１１日、全ての準備を整えた艦隊はシンガポールを出港。
インド洋を横断し、スエズ運河を通り、いよいよ欧州の戦場に赴くのである。

１９１４年６月末、オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻を、セルビア人青年が銃撃した事に

端を発する第一次大戦は、戦場を瞬く間に欧州全土に広げた。
しかし、中心となるのは、特に海軍に関してはイギリスとドイツの争いといっても過言では無かった。
イギリスは当時、世界最大最強の海軍力を誇ったが、ドイツの急激な増強に焦りを感じていた。
そこで自国の海軍力を増強する一方、友邦国であり、欧州から遠く離れたアメリカおよび日本に応援を求めた。
特に日本に対し強く願ったのは、一番艦の建造を自国で行った最強の巡洋戦艦である金剛級の派遣である。
しかし、日本にとっては虎の子である最新鋭の巡洋戦艦をおいそれと差出す訳にはいかず、悩んだ挙句、
当時Ｎｏ．２の座にあった河内級戦艦二隻「河内」「摂津」の派遣を決定した。
一度決まれば行動は早く、開戦翌年の2月半ばには欧州へ向け出港したのは前述の通りである。
なお、この記述は史実通りでは無い。
史実において欧州への艦隊派遣は、戦争も後半に入った１９１７年であり、その中に河内級戦艦は含まれてない。
又、河内級戦艦自体も史実とは異なっている。
史実の河内級は、主砲に３０．５ｃｍ砲連装６基１２門を亀甲状に備え、日本唯一の弩級戦艦らしい艦容であったが
艦首尾側と艦舷側では口径比が異なり（艦首尾が５０口径、艦舷が４５口径）、みすみす弩級戦艦であるところを
準弩級戦艦に成下げた失敗作であった。
その点、この世界の河内級は、３０．５ｃｍ砲連装６基１２門である点は変わらないが、全門を艦首尾線上に
配置し、小ぶりな扶桑級といった艦容の進んだ設計である。
ちなみに１２門全て５０口径砲を採用しているが、史実の様な散布界のばらつきが大きいという欠陥は
見付かっていない。

「暑ぅ・・・」

「摂津」の艦魂である摂津は萎えていた。
呉を出港した時は、まだ初春で肌寒い程だったのに、インド洋に入ってからのこの暑さは何なのだろう？
後部甲板に背負い式に配された主砲塔の影で冷気を養いながら、彼女はふと、遠くの海面を見下ろす。
八隻の駆逐艦が、自分や姉の河内、そして明石を囲む様にして同行しているのが見える。
いや、見えるという表現は距離があるから適切ではないかもしれないが、艦魂同士、艦の舳先に立ち、
懸命になっているのが感覚的に解るのである。
同行している八隻は全て樺級二等駆逐艦であり、トン数にしてわずか６００ｔあまり。外洋の大波は辛いだろう。
ややもすると遅れをとるところを、懸命に追従する姿は何とも健気である。
摂津も手伝ってやりたくなるが、艦魂である自分に出来る事は無い。
艦を操っているのはあくまでも人間だからである。
自分の身でありながら、自分の思い通りにならないのが何とも歯痒い。しかし、どうしようもない。

依然として暑い。摂津は「ふふっ」と笑い、茶目っ気を出してみる事にした。
帽子を脱ぎ、軍刀を外し、甲板に置いた。次に上着に手を掛け、それも脱いだ。
艦魂の普段の服装というのは、設けている国の海軍の軍装と同じである。

ついでに言うと、戦艦の艦魂は生まれながらにして将官で、摂津も少将の位を持っている。
連合艦隊旗艦となる戦艦は、その間だけ大将となる。
摂津には経験無いが、姉の河内は短い間ではあるが、この大将位に就いている。
今の大将はイギリス生まれの金剛だが、建造中の扶桑が就役する来年には、この位を譲る事になるだろう。
彼女は続けてズボンも脱いだ。シャツも、靴も、靴下も。
最後に下着までも脱いで、すっぽんぽんになってしまった。

「また、やっちゃった・・・」

摂津は自分の裸身を見ながら呟いた。
脱いだ服が飛ばない様に畳んで隅に寄せると、広い甲板を跳ぶ様に駆け出した。
搭載する砲によるものか、戦艦の艦魂である者の胸は一概に大きい傾向にある。
摂津もその例に漏れず胸は大きめで、走るたびにその清々しい身体が躍動する。
全てを露わにして受ける潮風が気持良い。彼女はこの感触が大好きだった。

しかし、本人が良くても、それを良しとしない者もいる。その筆頭が姉の河内だった。
摂津がこの姿で戯れているのを知られた時には、こっぴどく怒られた。
「帝国海軍に相応しい身なり・行動をしろ」だの、「部下の手本にならなくてはいけない」だの、
散々に説教を食らった。

大好きな姉は、ガチガチの軍人気質なのだ。
けれども、摂津本人は懲りもしない。このバレたら困るドキドキ感が堪らないらしい。困ったものだ。
しかも今は、姉以外にも天敵がいる。防護巡洋艦「明石」の艦魂である明石だ。
防護巡洋艦はその後の軽巡洋艦に該当し、艦魂は尉官クラスとなる。明石は中尉である。
「明石」の起工は日清戦争勃発直後の１８９４年。戦争には間に合わなかったが、その後日露戦争には参加しており、六英雄と讃えられる富士級・敷島級戦艦六姉妹の長姉「富士」とは同期の大ベテランだ。
そんな明石中尉の風貌は、髪を頭上で纏め、細縁の眼鏡を掛けた有能な秘書のイメージをしている。
けれども摂津にとっては、おてんば姫に仕える女中頭か、うるさい小姑という方がぴったり来る。
当然、まだまだ青二才の摂津は経験豊富な明石に敵いっこなく、会えば皮肉が交じった小言を言われるのが常だった。

摂津がそんな二人の事を思っていると、甲板に一人の男が現れた。
どうやら彼も休憩で、風に当たりに出てきたらしい。海面をぼんやり見ている。

「どうせ見えっこないんだし・・・」

摂津はしばらく彼を観察する事にした。
この時代の者としては背が高く、がっちりというより太り気味の体躯をしている。
顔付きは穏やかで人が良さそうに見えるが、軍人としての覇気はあ

まり感じられなかった。
今だったらメタボ予備軍か、秋葉原界隈を徘徊するオタクの風情である。
少なくともハンサムとは言い難い。
軍装は士官のそれだが、まだ若い。
摂津も知らない乗員だから今回初めて乗艦した新米士官なのだろう。
ふいに彼が振向いた。視線が合った。その瞬間、驚いた表情を浮かべた。
驚いたのは摂津も一緒だ。

「あ、あの・・・　もしかして・・・　私のこと・・・　見えちゃってる？・・・」

おそるおそる尋ねる。彼も驚きの表情の中に疑りの表情も加わり、怪訝そうに言った。
「ああ、見えてるよ。
だけど、君の様な娘さんが、そんな格好で、どうしてこの艦に乗っているんだい？
密航者なのか？　それとも間諜か？　だったら、ゆゆしき事になるが・・・」

摂津は立ちすくんだ。次の瞬間。

「い・・・いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

彼女の悲鳴は、艦隊中に響きわたった。

第2話　見えるの？（後書き）

素っ裸になる艦魂というと、艦魂小説の大御所、伊東椋先生の葛城嬢もそうですね。
別に真似したって訳ではなく、私の小説の場合、艦魂に限らずヒロインはこの洗礼を受けなければならないという事で、御了承下さい。

第3話　艦魂という存在

悲鳴を聞いて、姉の河内と明石が摂津の元に駆けつけた。
駆逐艦連中は操艦に手一杯で来れなかった。後で考えれば、これは幸いした。

艦魂は、艦に宿るものなので、その艦を離れる事が出来ない。
ただし、艦同士なら別で、自由に行き来出来る。摂津が姉の戦艦「河内」を訪ねたり、その逆も可能だ。
もちろん防護巡洋艦「明石」にも行けるが、摂津はやらないだろう。
往来するには、テレポーションというか瞬間移動というか、艦魂だけが持つ能力を使う。
その移動距離はやはり限りがあるものだが、艦隊の範囲内であれば、まずは可能である。

駆けつけた二人の見た光景は、胸を両手で抱え、素っ裸で蹲(うずくま)る摂津と、
それを呆然と見下ろす士官服の男であった。

「あ、貴方なのっ！　私の妹を裸にし、襲おうとしたのは！」

河内の剣幕に我に帰った男は、慌てて弁解する。

「待て！　俺は別に何もしていない！」
「待ても何も、この状況は・・・　問答無用っ！」

河内は今にも男に飛び掛っていきそうな勢いである。
いろいろと口うるさく説教する河内だが、その反面、妹を深く愛していた。

妹の事となると見境無くなるのは、彼女の悪い癖だ。
それを制したのは、明石だった。

「待って下さい河内中将。
どうやら摂津少将は、身包み剥がされて襲われそうになった訳ではない様です」
「どうしてそうだと解るの？　明石中尉」
「脱がした服がありません」
明石は端的に答えた。

「でも、別の場所で脱がして・・・」
「それでしたら、あれは何でしょうか？」
明石は砲塔の隅に畳まれた軍服を指差した。

「あれは摂津の軍装みたいね・・・　だったら・・・」
「俺が甲板に出た時、彼女は既に素っ裸で立っていたんだ」
男の説明もあって、河内は一つの結論に達した。

「だったら摂津、貴方は又、裸になっていたの？」
「・・・うん・・・ごめんなさい・・・お姉ちゃん・・・」
摂津は仁王立ちする姉を上目遣いで見上げ、悪戯がばれた子供の様に、ペロリと舌を出した。

「まったく、この妹はーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

今度は河内の叫び声が艦隊中に轟いた。

「艦魂か・・・」

男は呟く様に言った。

「うん、そうだよ。多聞さん。
私や河内お姉ちゃん、それに明石さんは、艦魂と呼ばれる存在なんだ。私たちの事、聞いた事無い？」
「無い訳じゃないが、噂でしか聞いた事がないからなぁ。艦魂が見えるという者も知らないし・・・
しかし、まさか俺に艦魂が見えるとはね。びっくりだ。びっくりといえば、君の姉さんも凄いな！」

男は山口多聞と名乗った。海兵４０期卒の少尉だ。
摂津は、彼を苗字ではなく名前で呼ぶ事に決めた。多聞という名前が気に入ったからだ。
その山口が摂津の姉である河内に驚いたというのは、事の次第を知った河内が、
例によって妹の摂津を、ある意味被害者でもある山口でさえ、うんざりするくらい説教した一件だ。
その後、河内は山口に対し、深々と頭を垂れて詫び、明石と共に自艦に帰っていった。

「うん。口うるさいのが玉に傷だけどね。でも、何よりも私を大事にしてくれる大好きなお姉ちゃんだよ」
摂津はにっこりと、山口に笑顔を向けた。

「しかし、俺には君たち艦魂全員が見れる訳ではないらしい。
実際、はっきり見えるのは、君と、姉さんだという河内艦の艦魂だけだ。
もう一人、明石艦の艦魂も来ていたらしいが、うすぼんやりとしか見えなかったし、
声もぼそぼそとしか聞こえなかった・・・」
「ええっ！　そうなの？」
「ああ、どうやら見える見えないに相性があるらしい。君以外に姉さんも見えたのは、姉妹だからだろう」

山口の口から「相性」と言われて、摂津は胸に高鳴りを感じた。
彼は摂津の好みのタイプではない。
自艦に乗艦してくる者の中には、「私が見えてくれないかな？」そう願いたい者が何人かいた。
いわゆる好みのタイプという奴だ。
しかし彼らは皆、摂津を風の様に素通りするだけだった。
願う者と願われる者が適う事の無い存在。
それでもなお相性というものが有るとすれば、これはひょっとして・・・

「だけど正直、俺はその明石艦や駆逐艦連中の艦魂が見えた方が良かったな。
俺は水雷科出身だから、その方が話が合うだろうし・・・」

山口は摂津に、いきなりグーで殴られた。

第3話　艦魂という存在（後書き）

艦魂が見える人間については、悩んだ末、制限を設ける事にしました。
本文中にもある通り、見えるにしても艦魂全員でなく、一部の艦魂しか見えないのです。
これはハーレム化を防ぐ為です。
本作では特に、見える側の人間が実在の提督ですしね。
テレポート等の艦魂の能力は、諸先生方の作品に準じてます。
ただし、人間を抱えてまでは出来ないとするつもりです。

第４話　欧州へ

Ｕボード等のドイツ艦の襲撃を警戒しながらのインド洋航行も無事に遂げ、遣欧艦隊はスエズ運河に入った。

スエズ運河ーこの運河は日本にとって恩恵が深い。
日露戦争で活躍した富士級、敷島級戦艦をはじめ、多くの艦がこの運河を通って日本にやって来た。
そして何よりも、日本にとって最大の脅威となるロシア・バルチック艦隊が、同盟を結んでいたイギリスの妨害で、
この運河を通る事が出来ず、アフリカ大陸を一周する航海を強いられた。
この長距離の航行による疲弊が、日本海海戦の大勝利の一因になったのだ。
日本にとっては救世主がごとき運河なのである。

この運河は又、スエズマックスという規定がある通り、航行する船舶に制限を掛けている。
その一つに、喫水が浅いので、それが深い船は通れないという一項がある。
当然、水中を潜ってのＵボートの攻撃など不可能であり、運河の管理はイギリスが実権を握っているので、
通過航行中は、まずは一安心出来る。
しかし、この運河を出れば、いよいよ欧州の戦場へと飛込む事になる。
その前に英気を養うつもりなのか、艦隊には穏やかな空気が流れていた。

摂津も甲板で、流れ行く景色を眺めていた。
それは正直あまり面白い景色ではなかった。砂浜の様な景色が続いているからだ。
彼女に気付かず通り過ぎていく乗員たちの話から、その砂浜が砂漠というのだと知った。

「よっ　此処に居たのか」
「あっ　多聞さん！」

艦魂である摂津を、唯一見る事が出来る山口多聞少尉が、彼女に気付いて近寄って来た。
「このスエズ運河を抜ければ、いよいよ欧州（ヨーロッパ）だな」
「うん、そうだね」
「そして、そこには戦いが待っている・・・　摂津は戦うのが好きか？」

山口にいきなり訊かれて、摂津はきょとんとした後、憤慨して答える。

「・・・あ、あったりまえでしょ！　私は戦艦の艦魂だよ！　戦う為に生まれてきたんだもん！
多聞さんこそどうなの？　嫌いって言うんじゃないでしょうね？」
「もちろん俺だって戦う武士（もののふ）を志し、海軍兵学校を卒業した身だ。嫌いといったら嘘になる。
けれども、やたら無闇に戦って敵兵を多く殺せば良いという訳じゃないんだ。
いかに味方の犠牲を最小限に抑えつつ、相手の戦意を喪失させるかが大事だと俺は思う。
一番良いのは、戦わずに和解する事なんだけどな。これがなかなか巧くいかない」

「そうだよ！　そんな弱腰じゃ駄目だよ！」
ムキになる摂津を、山口は優しく諭す。
「しかしな、摂津。この戦わずして和解するのに、お前ら戦艦は重要な意義を持っているんだぞ」
「え？　私たちが？　それ、どういうこと？」
「戦艦を建造するのには膨大なお金と労力が必要なんだ。それこそ国家の財政を左右するくらい。
そんな苦労して建造される戦艦は、いわばその国の国力の象徴だ。
そして、そんな国力の象徴である戦艦を数多く持っている国は強いという事になる」
「そんなの当たり前じゃない！　多くの戦艦があれば、戦って勝つに決まっているよ！」
「俺が言いたいのは、そうじゃない。
多くの戦艦を持ってる国を相手に戦えば、負けるに決まっているから、最初から戦わない。
そうすれば、双方とも殺しあわずに済み、国家は安泰だという事。
難しい言葉で言えば抑止力というのだが、その為にも戦艦の存在というのは意義がある。
もっとも、そんな戦いたくないと恐れられる国力の大きな国に成るには、
やっぱり戦って領土をぶん獲るかしかないから、戦いは避けられないという矛盾はあるのだけどな」
「ふ～ん、難しいんだね・・・」
見た目も頭の中も１６歳程度の少女である艦魂の摂津は、山口の話は難しすぎたみたいだ。
適当に相槌を打つ。

「ははっ　今此処で二人で話し合ってもどうなるもんでもないけどな。それより、これでも食うか？」

山口は饅頭を取出すと、摂津に与えた。
彼は配給される食事だけでは物足りず、自腹を切り、よく酒保で饅頭やあんパンを買って食っていた。
摂津と初めて出会った時も、実はあんパンでも食おうと甲板に上がって来たところだった。
この山口の大食漢は有名で、幕僚になった時の会食でも、山本五十六連合艦隊司令長官は、
愛弟子である彼の為に、本来一枚であるステーキを二枚用意させたという逸話があるほどだ。

「うん、ありがとう！」

摂津は嬉しそうに早速饅頭にかぶりつく。
しかし、艦魂が物を食べるという行為は、実はあまり意味が無い。
艦に宿る艦魂は、その艦の状態に直接左右される。
つまり、艦の調子が良ければ艦魂も晴れやかだし、艦の調子が悪ければ艦魂も鬱になる。
もちろん戦闘で艦が損傷すれば、艦魂も身体の該当する部分が負傷する。
そして、運悪く撃沈されれば、艦魂もその儚い生涯を閉じる事になる。
それが最も明確となる場所は、機関（エンジン）といって良いだろう。
機関（エンジン）が順調に稼動していれば、艦魂の調子も良く、
相乗効果もあって、スペック以上の速度での航行も可能だ。
逆に燃料等が欠乏していれば、艦魂の具合も悪くなる。
その意味では、燃料となる石油や石炭が艦魂の食べ物とも採れるが、
それではロボットやアンドロイドといった機械体と同一視されかね

ず、あまりに可哀想である。
それに、人間と同じに食事をする事によって艦魂が晴れやかな気分になれば、
艦の状態を僅かながらでも向上出来るので、まるっきり意味の無い訳ではないのかもしれない。

スエズ運河を通り、地中海に出た遺欧艦隊は、４月５日、マルタ島のイギリス海軍基地に入港した。
しばらくは、この地を拠点に活動する事になる。
折から、遺欧艦隊の到着を待っていたかの様に、ドイツは無制限潜水艦作戦の実施を宣言。欧州に新たな緊張が走る。

機を狙っていたとされる件ではもう一つ。
宣言がなされてから間もなくの５月７日、イギリス船籍の客船ルシタニア号がドイツのＵボートの
攻撃を受けて撃沈され、１９５９人の乗客・乗務員の内、１１９８人が犠牲になるという事件が起こった。
この犠牲者の中には１２８人のアメリカ人が含まれていた事から、アメリカは直ちに同盟国に対し、宣戦を布告。
戦艦を中心とした艦隊を差向ける事を発表する。
しかし、アメリカのこの一連の行動は、同国が戦争に参加したいが為の自作自演だったのではないか？
という疑惑が直後から起っていた。
この疑惑を裏付けるものとして、無制限潜水艦作戦宣言の直後と、あまりにもタイミングが良すぎる事、
ルシタニア号を撃沈したというドイツＵボートの声明が無かった事が挙げられる。
この疑惑説を強く推したのが、未来から来た原子力護衛艦「あそ」の元艦長である冬月優中将だ。

素性を明かせない彼は、一個人の談話として次の様に述べた。
「アメリカという国は、戦争に介入する為には、自国民を欺き、犠牲にする事を平気でやる国だ。
それでいて被害者面をし、なにが正義感に溢れた国といえるのか。
８６年後の２００１年９月１１日、アメリカは、この過ちを再び繰返す事になる」

そして、派遣する艦隊も明らかに日本遺欧艦隊を意識したものといえた。
六隻の戦艦の内、フロリダ級の二隻「フロリダ」「ユタ」は３０．５ｃｍ砲連装５基、
ワイオミング級の二隻「ワイオミング」「アーカンソー」は同じく連装６基の砲塔を持ち、
これら四隻は、河内級と同等の戦力である。
更に残りの二隻、最新鋭ニューヨーク級の「ニューヨーク」「テキサス」に至っては、
３５．６ｃｍ砲連装５基と、これは建造中の扶桑級と同等なのである。
金剛級巡洋戦艦を出し惜しみ、河内級戦艦二隻以下、防護巡洋艦と駆逐艦に留まった日本遺欧艦隊を
嘲笑う内容だったのだ。

第４話　欧州へ（後書き）

艦魂に対する足枷を又一つ。今度は食事は意味が無いという件。
他の先生方の作品では、艦魂が平気でお茶会やらパーティーを開いている中、
これはどうしたものやら。

艦魂については、私の独自の解釈で行ってますが、暗黙の了解があったり、
これは冒涜だと思われたら、なんなりと、御意見いただければ幸いです。

第5話　駆逐艦「榊」（前書き）

２０１０年９月２０日、大幅に加筆しました。

第5話　駆逐艦「榊」

マルタ島のバレッタ港を拠点とした日本艦隊。
防護巡洋艦「明石」以下駆逐艦隊は、直ちに無制限潜水艦作戦に対
しての艦船護衛の任に就いた。
当初は「極東国の二流艦隊なんぞに護衛など頼めるか！」と、小馬
鹿にした態度をとっていた各国も、
地味な任務ながらも誠意をもって当る姿を認め始め、護衛依頼は少
しづつ多くなっていった。
けれども、この二人は別だった。

「う～　暇だよぉ！」

摂津は椅子にどっかりと座り、天井に向って吼えた。

「今は我慢ですよ。摂津・・・」

戦艦「河内」内に設けられた誰も使ってない小部屋。
此処が艦魂である河内の部屋であり、艦魂たちによる遺欧艦隊司令
部ともなっている。
旗艦である河内が司令長官だからだ。
ちなみに次席司令官は攝津なのだが、実質的には明石である事は、
艦魂の間では明白だった。
河内は此処で事務作業を進めながら、妹の摂津を諌める。

「だけどさ、明石さんたちだけ活躍していて、私たちはただ此処で
のんびりしているだけだよ。
お姉ちゃんは、これが悔しくないの？」
「明石少佐たちは、自分に合った任務に就いているだけです。

今の護衛任務は、私たち戦艦には大袈裟過ぎます。
これで、のこのこ出撃して行ってUボートの攻撃を受けたとならば、
良い物笑いとなるばかりか、
明石中尉たちが築いてくれた実績にも泥を塗りかねません。
今は、私たちに相応しい任務を与えられる事を、ひたすら待つしか
ないのです。
私や貴方の艦に乗艦している人間も、気持は同じはずです」

妹の前では河内は平然とした態度をとる。しかし、内心はそうでも
なかった。
戦艦六隻から成るアメリカの派遣艦隊が、そのままイギリス本国の
第六艦隊として編入されたという話が
伝わって来たからだ。
同じく派遣艦隊を出しておきながら、あちらは本国艦隊に編入され、
こちらはイギリス本国から遠く離れた
地中海で、足止め同然になっている。
この温度差は何だというのだ？　河内は怒りと共に焦りを感じてい
た。

「そうは言ってもさあ・・・」

河内に諌められても、摂津は未だ不満で口を尖らせる。
不満の理由は姉が言った通りなのだが、原因としては山口も少なか
らず関わっている。
水雷科出身の山口は、日毎に多くなる護衛依頼に、応援要員として
刈り出される事が多いのだ。
その上、「山口少尉は指揮もキビキビしていてかっこいい」などと
駆逐艦艦魂連中の話しているのを聞くと、
落着かない気分になってしまうのだった。

そんな時、日本艦隊を震撼させる事件が起った。

６月１１日、イギリスの貨客船トランシルバニア号は、看護任務等に当たる女子を含む３２００人の乗員、その他、銃砲や弾薬等を満載して、フランス・マルセイユを出港した。
日本の駆逐艦「榊」と「松」は、その彼女を目的地エジプト・アレクサンドリアまで護衛する任務に就いていた。
二日目に入った６月１２日、順調に航行を続ける「榊」の左舷甲板上で、榊は佇んでいた。
彼女の片身である駆逐艦「榊」の前方には、イタリア半島が長々と横たわっている。
出発地マルセイユと目的地アレクサンドリアは、地中海を挟んだ対岸に当たり、航行はイタリア半島の海岸線を沿う事になる。
目を他方に転じれば、右斜め前方にトランシルバニア号の大きな船体が、その先には僚艦の「松」の姿もある。
榊は出航前の打合せで顔を揃えた二人の事を思い出していた。

駆逐艦は戦艦等と違って同型艦が多い。
そして、建造に手間が掛かり、同型艦であっても竣工時期に隔たりのある戦艦と違って、建造期間の短い駆逐艦は、大人数でも姉と妹といった上下の区別をする事はあまり無い。
特にこの樺級駆逐艦は、大戦を見込んで当時の日本としては珍しくマスプロ的に建造し、わずか四ヶ月で全１０隻が竣工に至った事もあってか、艦魂である姉妹も、そっくりの顔付きをしていた。
その為、髪型を変える等して、各自が区別出来る様に工夫している。

榊が背中のあたりで揃えた長い髪であるのに対し、松の髪は短く、あちこちピンピンと跳ねていた。
まるで自分の名の由来である松の葉の様である。
しかし、その様な外観上の区別をしなくても、この二人は明確に判別出来た。性格が正反対なのである。
１０姉妹の次女にあたる榊は、淑やかで、それでいて一本芯の通ったしっかり者の印象がある。
実際、長女である樺が遣欧艦隊に参加しなかった為もあってか、姉妹の纏め役を彼女は負っていた。
一方、八女にあたる松は、末っ子に近い為か、姉妹で一番やんちゃであった。
性格が両極端な事もあってか、二人はウマが合い、護衛任務においてもペアを組む事も多かった。

そして、今回のもう一人の仲間は、二人が護衛するトランシルバニア号である。
その艦魂（貨客船なので船魂と呼ぶべきか？）は、赤毛を三つ編みにし、ソバカス顔の素朴な印象があった。
外形年齢は二人と同じく１５歳くらい。丁度、「赤毛のアン」をもっと気弱にしたら彼女になるであろう。
二人はイギリスにも、こんなカントリーガール丸出しの少女が居る事を認識した。

「あ、あの・・・よ、よろしくお願いします・・・」
打合せの時、彼女は、（トランシルバニア）おどおどしく二人に挨拶した。

「こちらこそ宜しく。トランシルバニアさん」
「おう、任せな！　あたいたちが居れば何も怖い事はないからな！　ま、あんたは大船に乗った気分でいればいいからさ！」

榊は優しく、松は荒っぽく、二人も彼女に挨拶する。しかし彼女はきょとんとして二人を見詰める。

「あの・・・『オオブネニノッタキブン』ですか？」
「ああ、あたいたちの日本では、全てを任せて安心する事をそう言うのさ」
「で、でも・・・大きい船なのは私の方なんですけれど・・・」
「ふふっ　松、これは一本取られたわね」
「ははっ　違ぇねぇ！」

二人が何故笑い出したのか解らず、再びきょとんとするトランシルバニアであった。

榊はそんな昨日の出来事を思い出し、一人微笑む。
午前１０時２０分。天気は快晴。この地中海をクルージングしたい気分になってくる。
しかし今は戦時中。そんな悠長な事は言ってられない。
彼女はふと波間を覗き、次の瞬間、眼を見張った。
波間に白い線が一本、糸を引く様にこちらに向って走ってくる。続いて見張員が叫ぶ。

「左舷より魚雷接近！」

この報告に艦内は騒然となる。
榊はその白い線一魚雷の進路を一直線に延ばしてみる。その先にあるのは・・・トランシルバニア号だ！
しかし、多くの人員・物資を満載し、図体の大きな彼女（トランシルバニア）が避ける事は不可能である。
ならば、打つ手は一つだけ。

艦長の上原太一中佐以下全乗員、そして艦魂である榊は心を一つとした。

「全速前進！」

榊のさらりとした髪が突如逆立つ。
上原艦長の号令の下、「榊」の機関（エンジン）は、その最大出力を捻り出そうと激しく身震いする。
そして最大速力の３０ノット、いや、それ以上の速力で、魚雷が向かうトランシルバニア号との間に割って入ろうと躍起になる。

「お願い！　私の身体なんてどうなっても構わない！　だから間に合って！」

それは榊の、乗員たちの、強い願いだった。

「榊さん！」

赤毛の少女は、突然速度を上げた左舷の駆逐艦を心配そうに見詰める。

「がんばって！　あと少し！」

榊は己の片身を奮い立たせて叫ぶ。白き線は目前にまで迫っている。
トランシルバニアが、彼女の片身に乗込む多くの人々が、祈る想いで見つめる中、猛々しい轟音と、
同時に吹き上がった巨大な水柱が、「榊」の姿を視界から消し去った。

「・・・やっ・・・たの・・・か？・・・」

榊の身体は大きく舞い上り、甲板に叩きつけられ、意識は沈黙した。

「さ、榊ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」

僚艦である「松」の艦魂である松は泣き叫んだ。
無理も無い。最も仲の良かった姉妹が殺されたのだ。
しかし、榊は未だ沈（死）んだ訳では無かった。
「松」とトランシルバニア号の乗員たちは、水柱が納まった後、惰性で航行を続ける「榊」の姿を認めたのだ。
一方、艦魂の二人も榊が発する微弱な念波を察知していた。二人は同時に呆然と呟いた。

「・・・生きているの？・・・」

けれども、その艦影は随分と小さくなっている。
慌てて双眼鏡でその姿を確認した両艦の艦長は、「榊」の痛ましい状態に唖然とした。
「榊」は艦首から艦橋の後ろ、三本ある内の第一煙突までの部分が、すっぽりと無くなっていたのだ。
まるで、巨大な斧でばっさり断ち切ったかの様に。

今直ぐ榊の救助に向いたい！ーこれは、今の榊の姿を見る者全ての想いだったはずだ。
しかし、その想いは「松」艦長加藤次太郎少佐の、冷徹だが的確な命令に一喝される。

「トランシルバニア号の安全確保を第一とする。
この上、第二波攻撃で危害が加わる事があれば、榊のその身を呈した犠牲は無駄なものとなってしまう。
トランシルバニア号の周りを巡って対抗雷撃用意！」

「松」は停止したトランシルバニア号を中心に、円を描く様に航行し、その悔しい想いを敵潜水艦に
ぶつける様に、爆雷を投下し、砲撃し、機銃で海面を叩く。

「ちきしょう！　ちきしょう！　ちきしょう！　ちきしょう！　ちきしょう！　ちきしょう！」

松も発射される爆雷に、弾丸に、我が身を乗り移らせるかの勢いで咆哮する。
一方、被雷した「榊」も、自分がまだ生きている事を示すかの様に、やがて停止し、スクリューを逆回転させた
バック運転で、やはり後部甲板に残った機銃で海面を叩きながら、トランシルバニア号の元へゆっくりと
戻りつつあった。これは後部甲板にいて難を逃れた吉田庸光大尉の指示によるものだ。
傷付いてもなお、彼女（トランシルバニア）を守り通そうとする不屈の闘志は失われていない。

幸い、日本駆逐艦二隻の鬼神の如き守りに恐れをなしたのか、敵潜水艦からの第二波攻撃は無かった。

「・・・かき・・・さかき・・・」

榊は、嗚咽が交じった聞き覚えのある声に、ゆっくりと眼を開けた。しかし、その眼は曇りガラス越しに見る景色の様に、何を映しているのかさっぱり解らない。
それでも彼女には誰が側にいるのか理解出来た。

「・・・ま・・・つ・・・」

身体中を突刺す様に激痛が走る。それを堪えて声を出してみる。

「さ、榊っ！　気付いたのっ？　そうだよ！　松だよ！　あんたの妹の！」

松の返事は半狂乱になった。
榊は、「分かった」と答える代わりに微かに頷いた。そして、次の言葉を紡ぐ為に口を僅かに動かす。

「・・・と・・・らん・・・しる・・・」

今の彼女はそれだけ言うのが精一杯だった。

「トランシルバニアの事？　無事だよ！　此処に来ているよ！　姉貴が守り抜いたんだよ！」
「そうですよ。榊さん！　私は貴方に救われたのです。
いいえ、私だけではありません。私の片身に乗っていた多くの人たち。それがみんな救われたのです。
貴方の尊い犠牲によって・・・　ありがとうございます。本当に何と言って感謝していいものやら・・・」

松の他にもう一人少女の声が重なる。
その声は涙声ながら、昨日とは違って毅然としたものだった。

「・・・よ・・・かっ・・・た・・・」

声にはならなかった。しかし二人には充分理解出来た。

「さっ　これで安心しただろ？　姉貴は大怪我を負っているんだ。少し休みなよ。

あたいたちが見守ってやるからさ」

「ええ、もう大丈夫ですから」

二人に言われて、榊は微かに微笑み頷き、再び眼を閉じた。

松とトランシルバニアは榊が寝入ったのに安心したが、同時にこれが今生の別れになるのではと怖くなった。

何しろ榊の状態は酷いものなのだ。

左腕は肩からずたずたに引き裂かれ、無くなっていた。

顔も左半分が真っ赤に腫れ、左眼の視力を失っていると思われる。

そして、上半身と下半身は捩れて、両脚はあらぬ方を向いている。

白いセーラー服は、血で真っ赤に染められ、特に捩れた腹部が酷い。

おそらくこの部分の下は、飛び出た内臓で溢れているのだろう。

人間なら即死の状態である。しかし艦魂の榊は、艦魂だからこそ生きていた。

二人が榊の側について見守っていると、突然、二つの光が現れ、それは少女の姿を成していく。

少女たちは、松や榊と同じくセーラー服姿だった。

「失礼する。

私はイギリス海軍駆逐艦「ネメシス」の艦魂であるネメシス。こっちは同じくミンストレルだ。

救難信号を発したのは、そなたの艦か？」

イギリス駆逐艦の艦魂だという二人は敬礼しながら訊く。
二人は良く似た顔立ちと、揃って金髪なところから、松と榊と同じく同型艦の艦魂姉妹と思われた。
しかし、自己紹介したネメシスが、ツインテールでややキツめの印象を受けるのに対し、ミンストレルの方は、
ボブカットに無表情と、捉えどころの無い印象である。
外見年齢から松たち姉妹よりやや上に思えるが、生まれ出でた時より少女の姿を成した艦魂ゆえ、
その実年齢は極めてあやふやである。

「その通りです。救援要請に応じて駆けつけていただき、感謝します。
私は大日本帝国海軍駆逐艦「松」の艦魂である松。救援が必要なのは、この姉である榊です」

松も答礼しながら答える。
ネメシスは、横たわる榊の傍に跪（ひざまづ）き、その状態をしばらく観察した後、言い放った。

「失礼だが、貴官の姉上の状態は良くない。安楽死（水没処分）させた方が良いと見受けする」

それを聞いて松はキレた。跪くネメシスのセーラー服の喉元をいきなり掴み、無理やり立たす。
そして松より頭一つ分高いネメシスに向って怒鳴りつけた。

「んだとぉ！　おたくの海軍では、まだ息のある者を、むざむざ殺すのか！」

トランシルバニアも黙ってない。

「松さんの言う通りです！　この方は私の命の恩人。それを殺せとは、栄えある大英帝国の軍人は、それほどまでの人でなしなのですか！　許しません！　同じ大英帝国に生まれし者として恥ずかしいです！」

松ばかりか、トランシルバニアにまでえらい剣幕で怒られ、さすがのネメシスも狼狽する。

「ま、待て！　これだけの傷を負ったなら、わざわざ治療（修理）するよりも、生まれ（新造）変わらせた方が得策なのは常識だ。私はそれを言ったまでだ！」

「傷の浅い深い、損得勘定なんて、あたいらには関係ねぇんだ！共に戦ってきた得がたい姉妹（戦友）に、ほんの僅かでも生きる可能性があれば、それに賭ける。それが、あたいたちの流儀なんだ！」

「しかし、貴官らがいくら望んでも、決めるのは結局は人間たちだ！　貴官はそれでもなお・・・」

ネメシスはそこまで言い掛けて、ぴくりと反論を止めた。どうやら自分の片身の甲板上で行われている日本側との会談の様子を察知していたらしい。そして吐き捨てる様に言った。

「どうやら人間たちも貴官の姉上を生かす事にしたらしい・・・ったく、日本人て奴は、艦魂も人間も・・・曳航は私が行う。貴官とミンストレルは、引続きトランシルバニアの護衛に当ってくれ」

「榊」を破棄せず、あくまでも修理をと主張したのは、生残って指揮を執っていた吉田大尉だった。
「ネメシス」は、「榊」の大破した前部を後向き、つまり艦尾を前にして曳航の準備にかかる。
松は先ほど喧嘩した手前上、何かするのではないかという懸念はあったが、その手並みは鮮やかなもので、
いくらか安心した。
トランシルバニア号と「榊」を曳航する「ネメシス」が並んで同航し、その両側を「松」と「ミンストレル」が
護衛に当る。
一行はアレクサンドリアまでの航行を打切り、最寄のイタリア・サボナ港へ入港した。
フランスのマルセイユとイタリアのサボナは、国こそ違えども陸続きでかなり近い距離にある。
奮闘した榊には悪いが、艦隊は振出しに戻る格好となったのだ。

サボナ港には、たまたまイギリスの工作艦「ダルキース」が入港しており、ダルキース艦魂軍医が早速、
榊の様態を診てくれたは良いが、その顔は瞬く間に厳しいものとなった。

「酷いものね。生きているのが不思議なくらいだわ。私の手には負えない。応急処置をするのが精一杯。
希望通り治すのなら、入院（ドック入り）するしかないわね」

ダルキース軍医の診断に、松は榊が改めて重傷なのだと思い知らされた。

一方、艦としての「榊」の方でも、被害状況の確認と修理に際しての検証が行われつつあった。
落着いてよく見てみると、改めて被害の大きさを感じさせる。
実際は艦橋を含む艦首部分が潰され、大きく捲り上って後方へと倒れ込んでいるのであるが、
正面衝突したかの様にぺしゃんこになっている。
更に驚くべき事に、二連装の魚雷発射管に装填済みの魚雷の弾頭部が、捲り上がった前甲板に
突き刺さっているのだ。
見解の結果、艦首にある１２ｃｍ砲塔直下で敵魚雷が爆発。そこにある弾薬庫に誘爆したのが、
事を大きくした原因とされた。
しかし、この装填済みの魚雷まで誘爆すれば、間違いなく轟沈となった訳で、正に紙一重であった。
そして、作業中にこの魚雷が暴発する危険性から、まずは信管を抜く作業が行われ、続いて遺体の回収が
始まった。全壊した艦橋からは、上原艦長以下「榊」の幹部将校の遺体が次々運び出され、火葬された後、
遺骨は木箱に入れられ、荼毘に伏せられた。
死者の数は、サボナの病院に収容されながらも亡くなった者も含め、４８名にのぼった。

「榊」の準備が次々と整う中、僚艦の「松」の方でも新たな動きがあった。
三日遅れでトランシルバニア号が、本来の目的地アレクサンドリアに向けて出港する事になり、
「松」も護衛で同航する事になったのだ。
「榊」が抜けた穴は、そのまま「ネメシス」と「ミンストレル」が請負ってくれる事になった。
松としてはこのまま榊の側に付いていてやりたいのだが、自分だけ

では何一つ出来ない。
それが悔しく歯痒かった。
松は手当てを受けて眠る榊に、静かに、けれども力強く呟いた。

「姉貴、あたい、行って来るよ。又、戻って来るから待っていて！」

松は、それまで名前で呼んでいた姉の榊を、”姉貴”と呼ぶ事にした。勇敢で偉大な姉に敬意を表してだ。
出港する際、「トランシルバニア号」「ネメシス」「ミンストレル」、そして「松」、それぞれの乗艦者は皆、
無残な姿を晒して係留される「榊」に対し敬礼を送り、命運を祈った。もちろん艦魂たちとて同じだった。

トランシルバニア号は、無事アレクサンドリアに到着した。

第5話　駆逐艦「榊」（後書き）

今回は、史実の欧州派遣艦隊における最大の出来事、トランシルバニア号の救援と駆逐艦「榊」の
被雷について、私なりに艦魂を交えて書いてみました。

この出来事については、「トランシルバニア号を救う為に、駆逐艦「榊」は、その身を犠牲にして、
ドイツUボートの魚雷を受けて撃沈された」という間違った英雄譚が伝えられていますが、
これは二つの事項を一つに纏め、美化したものなのです。
もっとも本作とて、この間違った英雄譚をベースにはしているのですけどねw
実際のところ、「榊」と「松」は、護衛していたトランシルバニア号がUボートの雷撃で沈められ、
その乗員を救助したに過ぎません。つまり、任務としては完全に失敗したのです。
なのに各国で絶賛されたのは、当時「榊」や「松」と同様に、撃沈された船の救助に当った艦までも
敵の二次攻撃を受けて撃沈され、被害を大きくした事例により、
「雷撃されたら、残った船は救助活動せずに、さっさと逃げろ」と流布されていたところを
両艦が危険を顧みず救助活動に当った事を評価されたからです。
又、後に雷撃され大破した「榊」ばかりがクローズアップされてますが、この時危なかったのは、
むしろ「松」の方でした。
雷撃されたトランシルバニア号の乗員を助けようと、同船に横付けして活動していた「松」の舳先１０ｍ前を
第二波の魚雷が命中したのですから。

結局、この第二波攻撃がとどめとなって、トランシルバニア号は沈んでしまいます。
又、トランシルバニア号の３２００人の乗員の内、３０００人を救助したというのも、眉唾物に思えます。
３０００人を救助するという事は、一艦当り１５００人となりますが、小型の駆逐艦に、とてもそれだけ
乗せられるとは思えません。別データとしてある１８００人がせいぜいだと、私は思います。
そして、駆逐艦「榊」の名を有名にした？　被雷・大破の件ですが、これはトランシルバニア号護衛とは
別になります。
前件が１９１７年５月４日の出来事であるのに対し、今回は一ヶ月以上経った６月１１日であり、場所もギリシア近海。
護衛任務を終えて、「松」と二艦だけで帰還途中でした。
被害状況は概ね文中に書いた通りなので割愛しますが、大破はすれども沈んでません。
死者は５９名にのぼりました。本作では４８名と少なくしたのは、戦闘中で乗員も各部署に散っていたと
考慮してです。
又、救助に駆けつけてくれたのは、イギリス駆逐艦「リブル」が最初で、以下、同「ジェド」や
フランス水雷艇も来てくれました。
本作で救助に現れた「ネメシス」「ミンストレル」とは、後にイギリスから借与され、「橄欖」「栴檀」となった
駆逐艦の事です。
史実ではゴキブリが大発生したとかで、厄介払いとして押付けられた欠陥駆逐艦だったのですが
本作では時期を前倒しした上、いささかカッコ良く登場と相成りました。

ま、これらの史実は、私がぐだぐだ書くより、ググっていただければ、関連項目が数多く見付かると思います。
興味を持たれた方はどうぞ。

第６話　新しい仲間（前書き）

２０１０年９月２３日、加筆しました。

第6話　新しい仲間

「来た来たっ！　帰ってきたよ！」

摂津は嬉しそうにその艦隊を指差しながら叫ぶ。
隣では姉の河内が、やはり微笑みながら大きく頷く。
二人が居るのは、日本遣欧艦隊旗艦・戦艦「河内」のトップマスト上であった。

この日、三隻の駆逐艦が並走しながら、日本遣欧艦隊が本拠地としているマルタ・バレッタ港へ並んで
入ろうとしていた。
三隻の内、中央のは日本艦隊でおなじみの樺級二等駆逐艦だ。
しかし、その樺級駆逐艦を両側から挟む様に航行して来るのは、明らかに日本の駆逐艦ではない。
イギリスの駆逐艦である。
実は、樺級駆逐艦の後方に隠れがちの一隻の艦ーこれこそが今日の主役である駆逐艦「榊」であった。
僚艦「松」と共にイギリス貨客船「トランシルバニア号」護衛の任務に就いていた彼女は、同船の身代わりと
なって被雷、大破し、避難先のイタリア・サボナ港に係留されていた。
しかし、本格的修理を行う為に、本拠地であるマルタ島へ回航が決まったのである。
回航に当って、破損部である第一煙突から手前をすっぱりと切断し、応急処置を施した「榊」は、僚艦の「松」に曳航され、護衛には被雷時に駆けつけてくれて以来、腐れ縁となった「ネメシス」と「ミンストラル」を伴って
帰ってきたのだった。

それは英雄の帰還であった。
日本の誠実な護衛活動に対する評判は、徐々に高まりつつあったが、
今回、「榊」が自分の身を犠牲にして
までも護衛する艦艇を守り切ったという事実によって、それは一気
に頂点へと達した。
日本艦隊へ護衛の依頼が殺到したのである。
中には「日本艦が護衛に就かなければ、船は出せない」という強情
に言う船長まで現れ、「極東の二流艦隊」と
軽蔑された当初とは掌を返した様な好意的な扱いを受ける始末で
る。
しかし反面、日本は、その応対に翻弄される事になる。
護衛依頼を受けたくても艦が足りないのだ。
おかげで護衛任務に就く駆逐艦はフル稼働。時には隊長役の「明石」
まで、駆出される有様である。
その為、基地の管理者であるイギリスからは盛大な出迎えがあった
反面、当の日本側は出払っている者も
多く、出迎えた人数は少なかった。それは艦魂とて同じで、わずか
に二人、河内と攝津だけだった。
二人は「榊」が接岸されるのを見届けると、その身を光に包み「榊」
艦内へと転移させた。

駆逐艦「榊」の機関部倉庫室。此処が艦魂である榊の個室になって
いる。
英雄となった彼女の部屋としては、真に狭くみすぼらしいものだが、
元々小型である駆逐艦の居住性は悪い上、
本来の部屋であった艦首倉庫が壊れてしまっては仕方無かった。
又、通常なら榊や松が艦隊本部となっている河内の元に出向くとこ
ろであるが、ダルキース軍医の応急処置で
意識を取戻したものの、まだ歩く事も出来ない重傷の身であるゆえ、

河内と攝津の方から赴むく事にしたのだ。
ドアを開いて中に入ると、ベット上の榊は、先に到着した妹の松に上体を起してもらい、二人に謁見した。

「榊二等兵曹、おかえりなさい。良くがんばりましたね」

河内は微笑んで榊を労う。

「わざわざの御労足、感謝致します。榊一等水兵、只今戻りました」

答礼する榊の姿は痛々しいものだった。
身体中包帯でぐるぐる巻きにされ、それは頭部にまで及んでいる。
僅かに開いた右眼と口元で、表情が読み取れるだけだ。
欠けてしまった左腕も哀れである。けれども艦魂と艦は一身同体。
片身である艦の修理が進めば、回復する。

「ほらほら榊、間違っているよ！　あなたはもう、一水ではなく二曹なんだよ！」

榊の容態が思っていたより酷く、ともすれば沈みがちになる中、摂津は明るく笑って言った。

「え？　それはどういう事ですか？」

訳も解らずきょとんとする榊に、河内はまるで表彰状を読上げるかの様に淡々とした口調で答えた。

「貴方の我が身を犠牲にした勇気ある行動が、大日本帝国海軍の名誉を世界に知らしめました。
よって、その栄誉を讃え二階級特進、二等兵曹に昇格するものです」

そう言ってから河内は優しく微笑んで付け加える。「おめでとう。榊」と。

「し、しかし、私自身は護衛任務を完遂出来ませんでしたし、その後の事も松の助けがあってこそです。この怪我ではしばらく任務にも就けず、迷惑を掛ける事にもなります。私だけが昇格するのは不公平です！」

真面目で姉妹想いの榊らしく、自分だけ贔屓にした昇格に憤慨する。その肩に松は優しく手を添えて言った。

「でも、あたいだって嬉しいんだよ。姉貴の栄誉は、あたいら姉妹全員の栄誉でもあるんだからさ」

「そうそう。貰えるものはもらっちゃえ！　やる事は同じなんだし！」

松は心底嬉しそうに、摂津は無責任に、榊を讃える。

「二人の言う通りですよ。二等兵曹となっても、任務内容は現状通り、特に変わりはありません。それよりも今の貴方は、ゆっくり養生して、その身体を完治させる事が先決です。任務の事は考える必要はありません」

「しかし・・・」

河内の説明にも、未だ榊は納得いかなそうな表情ををする。その時、二人の少女が戸口の前に立って敬礼した。

「失礼します。大英帝国海軍所属の駆逐艦「ネメシス」ならびに「

ミンストレル」です。
駆逐艦「松」および「榊」の護衛任務終了をもちまして、日本海軍第二特務艦隊へと転属となりましたので挨拶に伺いました」

二人に対し、河内もネメシスとミンストラルに凛として答礼をする。

「御苦労。私が第二特務艦隊司令長官の河内です。貴官らの転属を歓迎します」

そこまで言って彼女は毅然とした表情を崩す。

「堅苦しい挨拶はここまで。丁度貴方たちの事を話そうと思っていたのよ。
こっちが副官である妹の摂津。榊と松の二人については知ってるわよね？　お世話になったわ。
その他のメンバーは全員出払ってしまっているので、追々紹介する事にしましょう」

とはいっても、狭い部屋にもうこれ以上は入れない。
そして、話を聞きつけた松が、今度は榊に続いて驚く番であった。
知らされてなかった彼女は、ぽかんとして言った。

「何だ、あんたたち、あたいたちのところに来るのか？」

駆逐艦「松」の甲板上で、艦魂である松と、日本艦隊に転属し、その名を楫欖（かんらん）と改めたネメシス、
同じく栴檀（せんだん）と改めたミンストラルの三人が佇んでいた。
もっとも、栴檀は相変わらずぼ～としており、二人と一緒にいるだ

けだったが。

「しかし驚いたな。あんたたちが日本艦隊に転属になるとはね」
「何だ、不満なのか？」
「いやいや大歓迎さ！　正直、榊が抜けて、どうなるのかと思っていたからさ。
あんたたちが来てくれて助かったよ」
「まだ来たばかりだ。役に立つかどうか解らんぞ」
「初めてじゃないだろ。トランシルバニア号の護衛や、今回の「榊」の回送につき合ってくれた事で、
あんたたちの実力は少しは分かっているつもりだよ」
「随分と買い被られたものだな」
「まあね」

松はニヤリと笑った。無愛想でお堅い橄欖も口元を緩めた様だ。

「ところで、日本艦隊（ここ）は、戦艦司令官が駆逐艦我々と、あんなにも仲の良いものなのか？」

橄欖が訊くのは、先ほどの二人の歓迎会の事だ。
河内は榊が養生するにあたり、狭く環境も良くない自室よりも、戦艦内にあって比較的広いスペースが確保
出来ている摂津の部屋に同居する様に促したのだ。
広さの点では同型の戦艦内に部屋を持つ河内とて同じなのだが、こちらは艦隊司令部も兼ねていて手狭な事も
あって、摂津の部屋となったのである。
同時に榊の世話係までも命じられた摂津は、当初不満そうだったが、決まってしまえば「だったら自分の部屋で
榊の帰還と、橄欖と栴檀の二人の歓迎会をやろう」と言い出した。
そして、どこから調達してきたのか食べ物

まで用意し、全員で五人と、ささやかながらも会が開かれたのだった。

「何でそんな事を訊くんだ？　英国艦隊は違うのか？」
「ああ、我々駆逐艦にとって、戦艦は格が違いすぎる天上人みたいなものだからな。
はなから相手になんかしてくれない。
それが此処では戦艦の艦魂である二人が、駆逐艦の艦魂でしかない我々の転入を喜んでくれ、
貴官の姉上の世話までしようとしている。これがどうも解せないのだ」
「そんなにおかしいものなのか？
ま、あたいたちは全員でも１１人、あんたらを入れても１３人の小所帯だからな。
仲良く助け合わないとやっていけない、といったところなんだと、あたいは思ってるけど」
「そんなところなのか？」
「そんなところなんだよ」

二人はお互いを見て、再びニヤリと笑う。

「あの時、貴官が何としてでも姉上を助けると言い張ったのも、少しは解った気がした」
「へえ、そうなのか？　とにかく、あたいの姉妹たちもあんたらに悪い想いはさせないはずだ。
よろしく頼むわ。期待しているから」
「だから、買い被り過ぎだって言っただろう」

松が手を差出すと、彼女も握手に応じてきた。
二人の握手にもう一つの手が重なった。栴檀が松の顔をじっと見詰

める。

「ああ、栴檀もよろしくな」

栴檀は小さく「うん」と頷いた。

第６話　新しい仲間（後書き）

早くジュットランド海戦に行きたいのですが、あれやこれや取り入れていたら、
結構長くなりそうです・・・ｏｒｚ

第7話　艦魂一者と物として（前書き）

２０１０年１０月３日、冒頭部を追加、全体に加筆しました。
又、タイトルを「攻めと守り」から変更しました。

第7話　艦魂一者と物として

戦艦「摂津」の艦舷甲板。そこに一人の少女の姿があった。
いや、一人ではない。もう一人、小柄な少女を背負っている。
背負われている少女は、身体中を包帯だらけにしての痛々しい姿である。
二人は此処から見渡せるある一点を見詰めていたが、やがて背負っている側の少女が、もう一人に声を掛ける。

「それじゃ、行くよ！」

「はい。よろしくお願いします」

背負われている少女も答え、振落されない様にする為か、相手の胸元に回した右腕に幾分かの力を込める。

「いっせーの・・・せっ！」

掛声と共に、跳び上がったかと思われた二人一つとなった少女たちを、光が包み、やがて消え去った。

二人が光と共に再び現れたのは、修理中の駆逐艦「榊」の甲板上だった。
榊を背負った摂津は、そのままラッタルを降りて艦内へ入っていく。
行き着く先は、艦魂である榊の本来の居住区である機関室倉庫である。

「いつも通り後で迎えに来るからね。それまでゆっくり寝てなよ。何も無いと思うけど、異常があったら直ぐ呼んで」

摂津は榊を粗末なベットに寝させながら言う。

「はい。ありがとうございます」

榊も攝津に成されるままに自分の身体を横たえる。

「じゃ、又ね！」

摂津は榊ににっこり微笑んで見せ、倉庫であるその部屋を後にした。ドアを閉める。前方からはカコーンカコーンと金属を打ち鳴らす甲高い音が聞こえてくる。

榊の艦体を修理している音である。

しかし、それは歯切れの良いものではない。何か陰鬱で、やる気が感じられないのだ。

摂津はその雰囲気が嫌なのか、笑顔から一転、顔を顰(しか)める。

そして、早くこの場所から立ち去りたく、急ぎその身を光で包んだ。

艦魂はその片身となる艦無しでは生きられない。

艦と一身同体の彼女たちは、その艦からエネルギーを得ているからだ。

それは、森で暮らすドライアド（樹の精霊）が、森から生命力を得ている故に、その場所から離れて暮らせないのと似た理屈なのかもしれない。

これは例え同型艦であっても代替不可能である。

今、摂津の部屋で療養中の榊がそうした様に、一日の内の数時間でも、エネルギー補給の為に自分の艦に

留まる必要があった。

「・・・う～ん・・・」

自分の艦に戻った摂津は、開放された気分に身体を大きく反らせて伸びをする。
マルタは今日も快晴。地中海に注ぐ光は眩しく戦艦「摂津」の甲板に反射する。
そんな光に目を細めながら彼女は辺りを見回すと、一人の人物に目が止った。
士官姿のその男性には見覚えがある。

「多聞さ～ん！」

彼女は士官の男ー山口少尉を見定めると、その名を叫びながら彼の元へ駆け寄って行く。
しかし、山口の方は、駆け寄って来る者が艦魂である摂津だと解ると、たじろぐ態度を示した。
彼女もそれが気に障り、口を尖らせてて言い放つ。

「酷いよ多聞さん！　私だと解ったら露骨に嫌そうな態度を取って！」
「い、いや又、『食べ物を沢山、酒保から買って来い！』と催促されるのかと思ってな・・・」
「だからぁ、あれは新しく仲間になった橄欖と栴檀の歓迎会の為だと言ったでしょ！」
「えっ？　そうだったのか？」

わざと惚(とぼ)けて見せる山口に、摂津は「ったく！」とばかり、怒りから今度は呆れた様子を表すが、
直ぐに笑顔へと変わる。本当に表情が多彩な娘である。

「でもね。おかげで助かったよ。二人共、とっても喜んでくれたんだよ！」
「そうか。それは役に立って良かったよ」

山口とて海軍男児だ。
感謝される相手が艦魂の娘だろうと、女性からなのは格別に嬉しい。

「それにね。戦艦の艦魂である私やお姉ちゃんが気楽に接してくれた事に驚いたみたいだよ」
「ほう、それはどういう事だい？」
「うん。後で松から聞いた話だと、イギリスでは艦魂であっても、戦艦と駆逐艦とでは
扱いが天と地くらい違うんだって」
「へえ、そういうものなのか」

山口も軽く相槌を打つが、思い当たる事が無い訳では無かった。

『鬼の山城、地獄の金剛、音に聞こえた蛇の長門。　日向行こうか、伊勢行こか、いっそ海兵団で首吊ろか』
『地獄榛名に鬼金剛、羅刹霧島、夜叉比叡。乗るな山城、鬼より怖い』

これはもっと後の時代の戯れ歌の一節であるが、出てくるのは全て戦艦の艦名だ。
摂津たち戦艦の艦魂が聞いたら、真っ赤になって怒りそうな内容である。

けれども、実は戦艦乗務員の厳しさを詠ったものなのだ。
以前にも述べた通り、戦艦は海軍の中心であり、象徴でもある。
当然、戦艦に乗込む者はそれに相応しくあるべきと、他の艦種に較べて特別に厳しい教育が課せられる。
これは一兵卒であっても、いや、一兵卒だからこそ行われるのだ。
良い方向で捉えれば、戦艦乗りはエリートだという事になる。
「帝国海軍が手本とし、数多くの戦艦を擁する大英帝国海軍においては、艦魂に至るまでこのエリート意識を
持っているのかもしれないな・・・」
しかし、山口のこの考えも、目の前で屈託の無い笑顔を見せる艦魂の娘を見ると揺らいでしまう。
戦艦の艦魂という事で上位にいるはずの彼女が、エリート意識を持っているとはどうにも思えないのだ。
「ま、摂津がこんな能天気な性分だから、イギリスの艦魂たちも驚いたのだろう」
彼はそう結論付ける事にした。

「あっ　ほらっ！」

突然、摂津が港の一箇所を指差した。
山口も指差す方向を眼で追うと、二隻の駆逐艦が出港し、こちらに近付いて来る。
話題の主であった「橄欖」と「栴檀」である。
イギリスから転属となった二艦であるが、借与されたのは艦自体だけで、操艦する乗員はこちらで工面しなくてはならない。
修理中の「榊」の乗員が真っ先に宛がわれたのはもちろんであるが、それでは全く足りないので、「河内」や

「摂津」の乗員の中からも、助っ人として駆り出されているはずだ。
今日は、それら混成された乗員の、訓練目的の出航であった。

やがて「橄欖」と「栴檀」は、「摂津」の艦舷を横切って行く。
甲板上の二人は敬礼して二艦を見送る。相手も答礼してくる。
しかし、二人が敬礼を贈る相手は違っている。
山口は二艦の乗員に、摂津はおそらく舳先に居るのであろうイギリス生まれの艦魂二人に。
遠ざかっていく二艦を見ながら、山口は摂津に訊く。

「なあ、艦魂であっても、生まれた国が異なれば、顔立ちも違ってくるものなのか？」
「うん。今は橄欖と栴檀となった二人もイギリス人らしいよ。揃って金髪だし」
「イギリス人らしいというのなら、金剛艦の艦魂もそうなのか？」
「そうだよ。彼女も金髪で、やっぱり私たち日本生まれの艦魂とは違ってる」
「富士艦や三笠艦も？」
「う、うん、そう」

「富士」や「三笠」の名を口にした際、摂津はやや緊張した面持で答える。
どうやら艦魂社会では、日露戦争で活躍した六隻のイギリス生まれの戦艦「富士」「八島」「敷島」「朝日」
「初瀬」「三笠」の艦魂は、六英雄と讃えられる特別な存在であるらしい。
中でも末妹にあたる三笠は、当時の連合艦隊旗艦であった事から、唯一元帥職にあるというのだ。
我々で言うところの東郷平八郎元帥みたいなものなのだろう。
ちなみにこの世界においては、機雷によって喪失した「八島」「初

瀬」とも健在で、六隻が揃って日本海海戦に
臨み、大勝利の立役者となっている。六英雄と言われる由縁だ。
又、その為か香取級戦艦の追加発注は行われず、巡洋戦艦の先駆け
となる筑波級、鞍馬級も
建造されてない。僅かに薩摩級の「薩摩」「安芸」の二隻が建造さ
れただけである。
これとて史実の薩摩級が、前弩級艦か、せいぜい準弩級艦であるの
に対し、３０．５ｃｍ砲連装４基８門を
備えた純然たる弩級戦艦である事が違っている。

「でも、何でそんなに外国の艦魂に拘(こだわ)るの？
はは～ん、多聞さんは金髪の美人さんが好きなんだ。やらし～！」

摂津は茶目っ気たっぷりに軽蔑の眼差しを山口に送る。

「おいおい、俺はただ、軍艦も国によって特徴があるというから、
艦魂でもそうなのかと思っただけだ。
だいたい、お前たち姉妹以外の艦魂は俺には見えないのだから、美
人も何もないだろう」

山口ももっともらしい言い訳をする。
彼が見える範囲で存在するのは、摂津とその姉の河内の二人だけだ
が、この二人とて美人なので、
見えなくとも期待するのは、あながち嘘でもないのだが・・・
これでも摂津は納得した様だ。

「あ、そっか。残念だね～！」

「残念」という言葉を強調して皮肉交じりに言う。

「ところで、多聞さんは榊の状況調査に行ったんでしょ？　どうだったの？」

話題を変えて摂津が訊く。
彼女が言うのは、「松」が先ほど出港していった二艦と共にトランシルバニア号の護衛を果たした帰路、
マルタ島に立寄り、戦死した上原艦長の後継艦長となる佃粂太郎少佐ら「榊」の回航要員を乗せて
係留されているサボナ港に戻る際、水雷科出身の山口も被害状況調査員として同行した事だ。

「あれか・・・あれは予想以上に酷い状態だった。
魚雷の威力や、それを発射する潜水艦の脅威を、まざまざと感じさせられたよ」

山口はその時の事を思い出しながら答える。
彼が赴いた時、「榊」の艦体はある程度は片付いていたが、全体の1／3を失った姿に驚愕したものだった。

「それで、榊は大丈夫なのか？」

艦魂である榊の様態を、今度は攝津に訊いてみる。
艦体があの状態では、片身である艦魂が無傷だとは考えられないからだ。

「うん、重傷だけど元気だよ。私たちはいくらボロボロになっても、没しない限り死なないから・・・
もちろん、人間が治してくれないとそのまんまだけど。今は私の部屋で面倒看てる」

摂津は寂し気に答える。
人間の少女の姿をしているとはいえ、艦魂は人間とは明らかに違っている。
それは人間より遥かに強靭な身体を持ちながら、自分自身では何も出来ない歯痒い存在であり、自分たちは人間たちが争い合う為に生を受けたモノである事。
これらの事実は、いくら能天気な摂津でも解り切っている。

「そうか。それは良かった。宜しく言っておいてくれ」
「うん。わかった・・・」

山口は静かに言い、摂津も静かに答えた。

「それで、摂津はイギリスという国について、どれくらい知っている？」
「どれくらいって言われても・・・」

いきなりの質問に摂津は当惑した様だ。再び顔を顰めて考え込む。
山口はその様子を微笑ましく思いながら話し始めた。

「イギリスの本国は、実は欧羅巴（ヨーロッパ）大陸の片隅にある島国にすぎない。ちょうど日本が亜細亜（アジア）大陸の片隅にあるのと同じだ。
大きさで言えば、むしろ日本の方が大きいくらいだ。
そんなちっぽけな島国が、何で戦艦を何十隻も作れる様な大帝国になったと思う？」
「さあ？・・・」
「インドをはじめとして、世界各地に数多く持つ植民地のおかげだ。
そこで産み出されるさまざまな物資が、大英帝国繁栄の礎（いしずえ）となっている。
しかし、これら物資の多くは船で運ばれるから、それらが潜水艦の

魚雷で次々に沈められれば、いかに繁栄を
極めた大英帝国といえども、たちまち崩壊する危険性を秘めている。
そして、これは同じ島国である日本とて同じだ。
今の日本の対外的領土は、台湾と樺太（この世界においては日露戦
争において樺太全島を保有している）程度
しかないが、将来、その版図を大きくする事があれば、現在のイギ
リスが置かれた状況を顧みる時が来る
だろう。俺は考えるのだが、敵国に対しては、潜水艦を建造して輸
送船を次々沈める事で国力を削ぎ、逆に
自国に関しては、その潜水艦の攻撃から輸送船を守る為に、護衛艦
艇を整備する必要が将来出てくるのでは
ないかと思う。大きな戦艦を一隻造るより、その分、むしろ潜水艦
や護衛艦といった小艦艇を数多く造った方が
現実に即しているのかもしれない。摂津たち戦艦にとっては気の毒
な話だけどね」
「でも、多聞さんは前に『戦艦はその国の国力の象徴だ』って言っ
たじゃん！」

気の毒だと前置きしていながらも、戦艦を軽視する山口の発言に、
さすがの摂津も気を害したらしく、
大声で否定する。彼は優しく宥（なだ）める様に話を続ける。

「たしかに今の時代において、戦艦の持つ価値観は大きい。
しかし、兵器の発達は日進月歩だ。特に今時の様に大戦が起きれば、
それは更に急加速する。
何時その価値観が覆るか解らない。案外・・・」

山口はそこで口を噤（つぐ）んだ。

「案外・・・何なの？」

摂津は不思議に思って訊く。

「いや、単なる戯言だよ」

「えーーーー！　何を話そうとしたのか教えてよ！」

「だから戯言だって・・・」

笑って誤魔化す山口だったが、彼はこう言おうとしていたのだ。

「案外、飛行機が戦艦を沈める時代が来るかもしれない」と。

こんな事、冗談でも戦艦の艦魂である摂津には言えない話だ。

しかし２６年後、再び起こった世界大戦でそれは現実のものとなる。

しかも彼は、その飛行機を束ねる航空母艦「蒼龍」「飛龍」の二隻から成る第二航空戦隊の司令官になるのだ。

そして、今行われている輸送船護衛の経験は、その後に全く顧(かえり)みられる事無く、史実において日本は壊滅の道を辿る事になるのだ。

第7話　艦魂一者と物として（後書き）

なかなか進みません・・・ｏｒｚ
次回は、史実には無いイタリアとオーストリアのアドリア海での戦闘に介入なんて、書いてみようかなあｗ

第8話　新たなる動き（上）（前書き）

今回から次回にかけて、性行為は無いものの主人公が全裸となる描写が出てきます。
この手の描写を好まれない方は、読まれるのを控えられた方が良いと思います。

第8話　新たなる動き（上）

「今回も無事に帰って来たな・・・」

単艦での護衛任務を終えた松は、己の片身である駆逐艦「松」の舳先に陣取り、近付きつつあるバレッタの街並みを見回しながら呟いた。

マルタはちっぽけな島に過ぎないが、地中海のちょうど真ん中に位置し、古来より要衝となっている。

中心都市バレッタは、１６世紀半ば聖ヨハネ騎士団のイスラムに対する橋頭堡として、要塞が建設された事で発展し、今から７０年後、その当時の街並みは世界遺産として登録される事になる。

艦が接岸し、一通りの帰港作業が終了するのを見届けた松は、その身を戦艦「河内」艦内へと転移させた。

「護衛任務の遂行、御苦労様。次の任務が下るまで待機してなさい」

「はい！　了解しました！」

「これから榊のところへ行くつもり？」

「あ、はい！　その予定です！」

「榊はこの時間、摂津の部屋にいるはずだわ。行ってあげなさい。喜ぶわ」

「ありがとうございます！」

松に限らず駆逐艦の艦魂たちは、帰還すると「河内」艦内に設けられた司令部に出頭し、結果を報告した後、

「摂津」艦内へ足を運ぶのを常としていた。

何故ならそこには自分たちの姉である榊が養生しており、見舞いに行くのだ。

それと共に、部屋の主である摂津を交えて話の花を咲かせるのが、大きな楽しみであった。
護衛先で立寄った港の様子とか、護衛中の出来事とか、話のネタに困る事は無い。
司令官である河内も、そのあたりの事は気を利かせていた。

「おかえりなさい、松」
「おかえりぃ！　今回も任務ご苦労様！」

松が摂津の部屋に行くと、予想通り二人が迎えてくれた。
姉の榊は依然として包帯だらけでベットに横たわる痛々しい身だが、彼女が行くと上体を起し、嬉しそうに声を上げる。
そしてもう一人、この部屋の主である摂津は白地の第二種軍装姿だが、上着を脱いでシャツだけのラフな格好だ。上着は椅子の背に無造作に掛けてある。
そのシャツ姿さえもどこかだらしないが、とびきりの笑顔を向けてくれる。

「姉貴、具合はどう？」
「・・・う～ん、あまり変わり映えしないかな・・・」

松は早速ベットに近寄り訊くと、榊は寂しげに申訳なさそうに答えた。
これは別に訊かなくても解っていた事だ。出航前に見舞った時と、姉の容態はほとんど変わってない。
榊の片身である駆逐艦「榊」は、ここバレッタのイギリス海軍工廠で修理を受けているが、勝手が違う
日本艦ゆえ、工事は難行しているのだ。

一説には十ヶ月近く掛かるかもしれないという。四ヶ月で竣工したにもかかわらずだ。
今は同僚となった橄欖（ネメシス）の言葉を思い出す。
「修理するより破棄して新造した方が良い」
その言葉に唇を噛む想いだが、今はとにかく一日でも早く工事が進むのを願うしかなかった。
そうすれば、艦と一心同体の姉も快方に向うのだから。

「くんくん、匂うなぁ。そんな臭い身体でお姉ちゃんに会うのは失礼だぞぉ！」

感傷に浸る松に、いきなり摂津が抱きついたかと思うと、顔を寄せ、嗅ぐ真似をする。

「ふ、副指令、いったい何をするんですっ？！」

摂津の突然の奇襲に松は驚いて訊く。

「だから、お風呂に入ってすっきりしてきなよ。お姉ちゃんと話すのは、それからでも良いと思うよ」
「は、はいっ　そうさせていただきます！」

松は即答する。元よりそのつもりだった。
艦魂だって女の子。身なりは常に綺麗にしていたい。だからお風呂は大好きなのである。
松とてそれは例外ではない。
しかし、戦艦等の大型艦はともかく、小型艦はスペースの関係で浴室を設置してない場合が多い。
その場合は大型艦に備え付けの浴室を借りる事になる。
人間なら港に停泊した際、上陸して立派で広々とした風呂に入る事

も出来るが、
艦艇間の行き来は出来ても陸には上がれない艦魂は、大型艦の風呂に入るのが唯一の方法となる。
その風呂でも男のエキスで溢れた様な一般兵用はもちろん、士官用であってもやっぱり嫌なものは嫌で、
専ら艦長専用風呂に入る事にしている。
それだって艦長が使用してないのを見計らって、無断で勝手に入るのであるが。
遺欧艦隊においては、「河内」と「攝津」の両艦が駆逐艦の艦魂用に浴室を開放しており、護衛任務を終えて
帰還した彼女たちの、これも大きな楽しみの一つであり、励みともなっていた。
ちなみに入浴の際には河内か摂津いずれかの許可を得る必要であるが、摂津艦を利用する場合が断然多い。
これは許可を得る際、榊の見舞いも出来る事、ついでにおしゃべりも出来る事、そして、摂津の気さくな
人柄にもあった。

「それで、お願いなんだけど、私も一緒に行っても良いかな？」
「副指令が、あたいと一緒にですか？」
「うん。私も一度、松と一緒にお風呂に入りたかったんだよ。駄目かな？」
「べ、別に構いませんけど・・・」

摂津は一応は上官である。上官の願いを無下に断る訳にもいかないだろう。
それに姉妹たちと一緒に風呂に入った事は、今までに何度かある。

「で、いつもの様に転移するんじゃなくて、ゆっくり歩いて行こっ！」

「歩いてですか？　たまには良いかもしれませんね」
艦魂だけが持つこの不思議な能力は、少なからずエネルギーを使う。歩いて行くのとどちらが疲れるか判らないが、のんびり行くのも楽しいだろう。

「それからね・・・」
「ま、まだ、何か条件があるんですか？」
松は、何か企んでいそうなこの上官に次第に悪寒が走り出した。しかし摂津は、そんな彼女の想いなど微塵も感じず、にんまりと笑って言い放つ。

「うん。どうせお風呂に入る時は裸になるんだし、ここから脱いで行こっ！」
最初、松は意味も解らず、ただ呆気にとられるだけだった。しかし、やがて事の重要さが解ってくる。

「は、裸で・・・風呂場まで・・・広い艦内を・・・歩いて・・・行くん・・・ですか？・・・」
ゆっくりと一語一語、自分自身に言い聞かせる様に、松は訊き返す。それに対して摂津は、まるで良い物を貰った幼女の様に満面の笑みを浮かべて元気良く答える。

「うんっ！　そうだよ！」
松と笑顔の摂津、間に入った榊、三者で構成される空間の時間が凍りつく。

それを松の悲鳴が打ち破った。

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

「明石様は、本国で増援艦隊の準備をしているのは知っておられますよね？」

河内は事務仕事でペンを走らせながら、傍らに控える明石少佐に訊いた。

「はい。樺級駆逐艦の後継となる桃級駆逐艦四隻を急ピッチで建造中と聞きました。
それから、これは当艦隊とは関係ありませんが、フランス海軍が我々の活躍に惚れ込み、樺級の同型駆逐艦を一挙に１２隻発注したとも聞いております。
そして、それらを率いて装甲巡洋艦「春日」と「日進」の二艦も渡航するという事も」

暗誦でもするかの様にすらすらと答える明石。
二人の応対は、戦艦という海軍の象徴である艦魂と、今は時代遅れとなりつつある防護巡洋艦の艦魂という出仕の違いもあって、甚だ他人行儀だが、傍から姿だけ見ていれば、親子の様にも映った。
それはあながち嘘ではない。
姉の須磨と共に須磨級防護巡洋艦の姉妹を成す明石は、六英雄に讃えられる富士級戦艦姉妹と同期の大ベテランである事は既に書いた通りだが、同時に国産近代軍艦と

しても同じ防護巡洋艦である「秋津洲(あきつしま)」に
次ぐ古参であった。
これは薩摩級戦艦「薩摩」「安芸」に次いで、国産戦艦第二弾として生を受けた河内と攝津の姉妹として
みれば、生粋の日本生まれの大先輩であり、直系であるという点では母親的存在でもあったのだ。

「橄欖と梅檀の二人も先日から任務に就きましたし、妹たち(桃級駆逐艦)が来れば、彼女たち(樺級駆逐艦)も少しは楽になりますね。
けれども・・・」

河内は明石の言う事に頷きながらも、二十歳前の幼さが残る顔立ちを曇らす。

「もしかして、私の事で憂いておられますか?」

明石は河内の顔を覗き込む様にして尋ねる。

「ええ、桃級駆逐艦やフランス向け樺級駆逐艦を率いて、春日殿と日進殿の御二人が来られれば、
明石様は交代して帰られてしまいます。私はもっと貴方様からいろいろ教えていただきたかったのに・・・」

河内が特に教えを乞いたいのは、須磨と明石の姉妹が持つ掌握術というか、今風にいえばマネージャーと
しての優れた能力である。
これは好む好まざるに関係なく、許されざる状況の中、否応なしに身につけたものだ。
許されざる状況とは、即ち日露戦争である。
日清戦争終結後、日本の次なる脅威はロシアだった。

そのロシアに対抗する為に、日本は同盟を結ぶイギリスを中心に欧米から軍艦を買い漁った。
それはもう我武者羅といっても良い有様であった。小型の駆逐艦までもだから。
日清戦争集結から日露戦争開戦までに揃えた主だった艦は次の通りである。

イギリス
戦艦「富士」「八島」「敷島」「朝日」「初瀬」「三笠」
装甲巡洋艦「浅間」「常盤」「出雲」「磐手」
防護巡洋艦「浪速」「高千穂」「千代田」「和泉」（元チリ「エスメラルダ」）「吉野」「高砂」
フランス
装甲巡洋艦「吾妻」
防護巡洋艦「松島」「厳島」「橋立」（いわゆる三景艦）「畝傍」（回航中行方不明）
ドイツ
装甲艦「鎮遠」（清からの鹵獲艦）
装甲巡洋艦「八雲」
防護巡洋艦「済遠」（清からの鹵獲艦）
イタリア
装甲巡洋艦「春日」（アルゼンチン発注艦「リバタビア」）「日進」（同「モレノ」）
アメリカ
防護巡洋艦「笠置」「千歳」
国産
防護巡洋艦「秋津洲」「須磨」「明石」「新高」「対馬」「音羽」
一見して解る通り、日本艦隊は軍艦の博物館と揶揄されかねない各国軍艦の寄合所帯だったのだ。

艦魂社会においては、これではお国柄の相違から意思の疎通などあったものではない。
そんな中にあって、生粋の日本生まれである秋津洲、須磨、明石の三人は、日本が置かれた危機的状況を
一人一人丹念に説き伏せ、やがて迎える未曾有の国難に一致団結して当たる事に成功するのである。
その後、開戦初頭において、衝突事故により春日が吉野を沈(殺)めてしまい、一時、装甲巡洋艦たちと
防護巡洋艦たちの仲が険悪になるというピンチもあったものの、日本海海戦においては、戦艦六隻からなる
第一戦隊が、舵が壊れて戦線を離脱した旗艦「クニャージ・スワロフ」を追って敵本隊を取り逃がしそうになる
失策を演じる中、巡洋艦からなる第二、第三戦隊は、その動きに良く追峙し、格上となる戦艦との戦闘にも
臆する事無く、バルチック艦隊壊滅を果たせたのは、第二艦隊司令長官・上村彦之丞中将と参謀・佐藤鉄太郎
中佐のコンビによる好指揮もさる事ながら、明石たちが尽力し築き上げてくれた巡洋艦艦魂同士の結束力の
高さに依るところも大きい。
戦艦たちばかりが六英雄として讃えられるが、日露戦争を勝利に導いた陰の功労者と言っても良いのである。
そういった地味ながらも輝かしい功績を残した事で、尉官クラスが普通の防護巡洋艦の艦魂の中にあって、
少佐という異例の高い地位を帯びている明石であるが、本人はそれを誇ろうともせず、今でも黙々と任務を
こなしている。
今回にしても、物心もまだつかない内に本国から遠く離れた異国の地に派遣された樺級駆逐艦の娘(こ)たちを
指導統率し、各国が絶賛する働きを得るまでに至ったのは、もちろん彼女たち個々の努力の賜物ではあるが、

明石のベテランならではの知識や経験から導き出されたところも又、大きく関与している。
河内は明石の飾らない人柄と共に、その優れた掌握術を敬い慕っているのだ。

「しかし、河内中将も連合艦隊司令長官を経験された身。私ごときが教えられる事は少ないと思いますが」
「私の務めた長官役は、平時の単なるお飾りにすぎません。
それよりも、同じ大日本帝国に生まれ、国家存亡の危機に立たされた二つの戦いを乗切って来られた明石様の
教えの方が、どれだけ私には役立つか」
「随分と買被られておられますね。私はそれほどの者ではありませんよ」
「いえ、本当です！」

河内はキッと明石を睨む。彼女は少しばかり強情なところがあった。
明石はそんな河内を哀れみを含んだ眼で見返すが、やがて諦めたかの様に小さく溜息を吐く。

「とにかく、私がお役御免となるのには、まだ少し時間があります。
桃級駆逐艦やフランス向け駆逐艦の竣工はまだこれからですし、本国からこちらに向うのも時間がかかります。
その間に私が出来る事でしたら何なりと」
「はい。それまでにじっくりと教えを乞う事にします」

河内は明石の返事に機嫌を戻し、笑みを溢す。
明石も微笑を浮かべるが、急に思い出した様に呟く。

「それにしても、今日はいつもとは人の動きが違う様な気がします」

彼女のこの発言に、河内も感じるところがあった。

「たしかに。佐藤（皐蔵）司令長官も先ほど出ていかれましたし・・・

何か起こるのでしょうか？　探りを入れた方が良いかもしれませんね」

松は生きた心地がしなかった。

戦艦「摂津」の全長は１８７ｍ。端から端まで歩く訳ではないが、

風呂までの道程が無限回廊に入ったかと

思われるほど果てしないものに感じる。

一糸纏わぬ姿の彼女は、比較的恰幅の良い上官の後ろを隠れる様に、

おどおどと歩き続ける。

いつもの威勢の良い彼女の姿は、恥ずかしさの中に全く影を潜めてしまっている。

一方、その上官である摂津にしても松と同じ姿なのだが、こちらは

恥ずかしさなど感じないのか、

全てを晒して堂々と歩いている。

時々行き交う乗員に対しては、見えないのを良い事に、おどけて敬礼までしてみせる余裕があるほどだ。

「ふ、副司令、もう止めましょうよぉ～　あたいたちが見える人間に会ったらどうするんですか？」

松は弱々しく摂津に訴える。

「大丈夫！　滅多にそんな人間はいないから！」

「でも、山口少尉みたいな人間も中にはいるんでしょ？」

「う～ん、だけど多聞さんだって私たち艦魂全員が見える訳ではないみたいだし、
万一、見える人が現れても、その時はその時だよ！
ほら松！　あなたも帝国海軍軍人の一人でしょ！　もっとしゃきっと歩かんか～！」

摂津は松の肩を鷲掴みにすると、今度は逆に盾の様に自分の前へと押出す。

「うわっ！　わわわわわ！　や、止めてください！　副司令！」

松は必死になって抵抗するが、駆逐艦の艦魂の悲しさ、体格も体力も戦艦の艦魂である摂津には敵わない。
「姉貴、もうあたい、耐えられないよ・・・」
摂津に言われるままに全裸となった松を、姉の榊は「がんばれ」と言って送り出してくれた。
その姿を想い浮かべながら、彼女は半ベソになって自分の身に課せられている羞恥プレイを呪った。

第8話　新たなる動き（上）（後書き）

今回は防護巡洋艦「明石」の艦魂である明石少佐に対して、ちょいと詳しく書いてみました。
最初はチョイ役で階級も中尉だったのですが、何しろ工藤傳一先生の渾身の力作「わだつみの向こう―明石艦物語―」のヒロイン明石の先代ですからね。おいそれと失礼な扱いは出来ないのでｗ
実際、かなりの活躍をしている訳で、こりゃ中尉じゃ割に合わんなと少佐に昇格した次第。
（中尉と記されている箇所も順次修正する予定）
一方、当作品のヒロインである摂津ときたら、第2話に続いてヌーディストぶりを発揮する困った奴ですｗ
しかしこの攝津、「明石艦物語」では金剛と大喧嘩をしているのですから、ところ変われば分からないものですね。
ま、当作品は架空戦記であり、戦艦「摂津」からして史実とは大きく違っているのですが。

第9話　新たなる動き（下）

摂津に伴われた松は、やっとの思いで戦艦「摂津」の艦長専用浴室に辿り着いた。

「これで艦長が使用中だったなんて事になったら嫌ですよ！」

松はぐったりしながら喚く。

「それなら大丈夫。川原艦長（川原袈裟太郎（かわはらけさたろう））大佐）が出掛けたのは確認済みだし、万一戻って来ても直ぐに風呂なんて入らないから！これから道具を出すね！」

松の心情などお構いなしに摂津は言い、そのまま手を掲げ、円を描く様な動作を行う。

すると、ほんのりした光の球が現れ、その中から桶にタオル、石鹸といった入浴に必要な物が出現する。

転移と共に艦魂だけが持つ特殊能力ー物質化である。

一見、無の場所から物を生み出す便利な魔法の能力に思えてしまうが、実はちょっと違う。

出現させられるのは、その艦に備えられた物に限るのだ。

つまり、艦内のどこか別の場所にある物を出現させているにすぎない。拝借していると言っても良いだろう。

艦魂はこうやって自分の生活に必要なものを取り出して使っている。

自分たちの着ている紺や白の軍装もそうだし、大きいところでは自分たちが寝るベットもそうだ。

出現させる際に自分の身体と同様、透明化出来るので、人の目に触れられる心配はないし、

軍装等の元々男性用に作られている物は、自分に合う様にアレンジ

する事も可能だ。
艦魂にしてみれば、自分と一身同体である艦に備えられている物を使って何故悪いという感覚だろうが、
物品を管理している主計兵にとっては、頭が痛い問題である。
何しろ用意しておいた物が突然消えて無くなるという事態がありえるのだから。
「艦魂により紛失」と届を出す訳にもいかないだろう。
今回、摂津が出現させた入浴道具も、本来なら許可を受付けた河内か摂津が、その際に出現させて駆逐艦
艦魂たちに渡すのが決まりとなっている。
又、出現させるにはそれなりのエネルギーが必要な事は、転移と同じである。

ちなみに摂津により羞恥プレイをさせられる羽目になった松は、転移によって逃げるか、物質化によって
軍装を出現させて身に着けるか、艦魂の持ついずれかの能力を駆使して回避する事は可能だった。
それを行わなかったのは、単にこの迷惑な上官に気遣っての事である。

「どうやら近々出撃になりそうですね・・・」

河内と明石はそれぞれ自分の艦内で情報を仕入れていた。
それによると、佐藤司令長官以下、遺欧艦隊幕僚や「河内」「摂津」
「明石」の艦長らは全員、イギリス海軍
基地の一角に設けられた司令部で会議中らしい。

「しかし、何処に出撃なのでしょう？　いよいよイギリス本国へで

しょうか？」

河内は幾分期待を含ませた眼で明石を見る。

「イギリスとドイツの二大艦隊は北海で睨み合いを続けてますが、今年1月23日のドッガーバンクでの巡洋戦艦同士の戦闘の後、双方とも被弾した事もあって、その後は成りを潜めてます。時期的にもイギリス本国へとは考え辛いでしょう。地中海内の範囲なのではと思います」

明石はベテランらしい見解を述べる。

「地中海内ですか？」

「はい。人間たちが地の果てまでも出撃すると言えば、艦魂である我々はそれに従うしかありませんが、条件に合う場所として、ここ辺りが考えられます」

彼女はテーブルに広げられたヨーロッパ地図の、ある一点を指差した。

それはイタリア半島の東に位置する地中海内の湾の一つだった。

「なるほど、たしかに明石様の言われるのはもっともです。私は摂津を呼んできます。三人で話し合いましょう」

河内はそう言って光に身を包んだ。

「ほら、松も一緒に入ろうよ！」

湯船にどっぷりと浸かった摂津が、立ちすくむ松を手招きする。
「でも、二人一緒に入ったら一杯一杯になってしまいますよ・・・」
「いいじゃん！　二人寄せ合って入れば！」

不安顔の松に対し、摂津はあくまでも一緒に入ろうと言い張る。
艦船の中でも戦艦は最大の部類に入るが、それでも浴室に割けるスペースは極く限られたものとなる。
ましてや二人が入っているのは艦長個人の為の浴室だ。男性である艦長に較べれば、二人は全然小柄で
あるが、松が言う通り二人一緒となれば、身体を寄せ合う状態になる事は容易に想像出来る。
それでも摂津は笑顔で招くので、松は覚悟を決めた。
尻を着いて湯船に浸かる摂津。その前方に曲げて突き出された脚の間に松は立つ。
該当年齢で言えば攝津は１６歳、松を含む樺級駆逐艦姉妹は１５歳と大差ない。
しかし露わにしているその身体は、戦艦と駆逐艦の艦魂の違いもあってか、一回りも二回りも違っている。
身長は摂津が１６０ｃｍ近くあるのに対し、松たちは揃って１５０ｃｍにも満たない。
そして胸に至っては、摂津が年齢以上に豊満であるのに対し、松のそれは遥かに起伏に乏しい。
摂津がニヤニヤと笑いながら見上げる中、松は体格差からくるコンプレックスに恥ずかしさを倍増させながら
あずおずと身体を湯船の中に没していく。
案の定、お互いの身体が触れ合うくらい近付き、自分の目前に相手の顔がある状態となる。

「ふふっ　松って何もかも小ぶりで可愛いよ！」
摂津の笑いがニヤニヤからニンマリに変わり、いきなり松の背に腕を伸ばしたかと思うと抱きついてきた。
松の貧相な胸に、摂津の密着して押し潰された豊満な胸の感触が伝わり、何とも言えない気分になる。
「ふ、副司令！　いいかげんにしてください！」
松は反抗するが、それは形ばかりで逃れる術は無い。
そして、摂津に抱かれた事で直接肌から肌に伝わってくる熱気と、浴室内に籠(こ)もる熱気が一緒になり、
次第に頭がぼうっとしてきた。

「・・・はい、摂津様と妹の松は、一緒に入浴に行きましたが・・・」
部屋に一人残された榊は、いきなり現れた河内の問いに遠慮がちに答えた。
河内は部屋の中を見回す。すると、摂津のベット上に無造作に脱ぎ散らかした衣服を見つけた。
上着やシャツ以外にも下着までである。それも二人分。
彼女はその下着を拾い上げて見る。二人がどの様な姿で浴室に向ったのか想像に難くない。
河内は榊に笑顔を向ける。それは榊からは多分に引きつったものに映った。
「ありがとう榊。私も浴室に行ってみます」

「あはっ！　いい気持！」

摂津は、深呼吸をするかの様に両腕を広げ、身体を反らす。
つんと上を向いた形良く整った胸を、地中海の風が優しく撫でていく。
バレッタの古い街並みが、地中海の蒼い海と空が、パノラマで広がるこの場所で、こうやって全てを晒して
立っていると、世界を独り占めした気分になってくる。

「副司令〜　もう戻りましょうよぉ〜　誰かが見てないとも限りませんからぁ〜」

彼女の脚元では、同じく素っ裸の松が蹲(うずく)まって愚痴る。

「あんっ　折角良い気分になっているのに！　大丈夫だって。私たちは見えはしないんだから！」

「でも此処はイギリス海軍の基地内ですよ。
人には見えなくても、イギリスの艦魂には丸見えなんですから、変な噂が立ったらどうするんですか？」

二人が居る場所は、戦艦「摂津」の前部三脚檣に設置された射撃指揮所の更にその上の屋根であった。
転移が可能な艦魂だからこそ到達出来る場所である。
抱きつかれ熱気に当てられ、ぐったりとなった松を、摂津は自分が原因であるのを棚に上げて、
逆上(のぼ)せた身体を風に晒して醒ますという独善解釈の元、この場所に

転移したのだった。
摂津は御満悦だが、当の松は風に晒されなくても、湯あたりはいっぺんに醒めたばかりか、更に冷や汗を
掻かされる羽目になるという豪(えら)い迷惑な話である。

「こんな高い処まで見上げる艦魂なんていないだろうし、見られたら、その時はその時！
『我こそは大日本帝国海軍戦艦「摂津」の艦魂の摂津だ！』って堂々と名乗ってやる！」

摂津は、正義の味方登場よろしく胸を張り腕を腰に当てて仁王立ちの姿勢を取る。

「そう・・・　だったら名乗ってもらいましょうか・・・摂津！」

優しくだが威圧感のこもった声と共に光の中から少女が現れる。

「お、お姉ちゃん・・・」

現れた少女に驚き慌てふためく攝津。その少女ー河内は、摂津の腕を掴み言い放つ。

「松、貴方は直ぐに摂津の部屋に戻って服を着なさい！　摂津、貴方は私と一緒に来るのよ！」

河内は妹の摂津の腕を掴んだまま転移する。
現れた先は、河内の自室であり艦魂たちによる遺欧艦隊司令部となっている部屋である。

そこには先ほどから明石が待っていた。
彼女は素っ裸の摂津の姿に一瞬驚くが、概ね予期していたのだろう。
喉元で「くくっ」と笑う。

「お姉ちゃん、酷いよ！　私を裸のまま連れてくるなんて！」
「貴方はその格好が好きなのでしょ！　だったらそのまま会議に参加しなさい！」
「えーーーー！　そんなぁ・・・それで、私が参加する必要がある会議なの？」
「大ありよ。私たちは出撃する事になるかもしれないの。その為の会議だから」
「え？」

不満たらたら叫んでいた摂津は一瞬で静かになり、姉を見詰める。
その眼に期待感が込められているのは、先ほど河内が明石を見た時と同じだ。

「ねえ！　何処何処？　もしかしてイギリス本国へ？」
「残念ながら違うわ。明石様と話し合って此処じゃないかと考えているの」

河内は先ほどの広げられたヨーロッパ地図の一点を指差した。
その後を受けて明石が解説する。

「此処はアドリア海と呼ばれる海域です。この海の両側にあるイタリア王国とオーストリア＝ハンガリー帝国は、
以前より派遣争いを繰広げており、今回の大戦でもイタリアは我々やイギリスと同じ連合国側、
オーストリア＝ハンガリーはドイツら同盟国側に付き、分かれて争う事になりました。

海軍力でも、イタリアがダンテ・アリギエーリとコンテ・ディ・カブール級3隻、オーストリア＝ハンガリーがフィリブス・ウニティス級4隻と、弩級戦艦数はそれぞれ4隻づつと拮抗し、しばらくはこの状態で睨み合いを続けていました」

摂津はその地図の上で頬杖をつきながら明石の話を聴いていた。

「ふ～ん。続けていたと言うからには、今は違うんだよね？」
「はい。拮抗が崩れたのは、去る8月2日、就役から間もないイタリア戦艦レオナルド・ダ・ヴィンチが、本拠地タラント軍港内で、突然爆発し沈没してからです。イタリアはこれをオーストリアの破壊工作によるものと断定、急ぎアドリア海の入口にあたるオトラント海峡に簡易堰を設けて封鎖を図ろうとしましたが、オーストリアも巡洋艦部隊を出動させ妨害攻撃を行うといった具合に緊張が一気に高まってきたのが今の現状です」

明石の言う事に摂津も頷く。

「へえ～　そんな状態になってたんだ・・・」
「能天気に裸で駆けずり回っている場合じゃない事は、貴方もこれで解ったでしょ！」
「はいはい。でもさ、その両国の争いに何で私たちが関係あるわけ？」
「関係が無い訳ではないわ。トランシルバニア号を狙って榊が被雷する事になった魚雷を放ったUボートというのは、どうやらドイツではなくオーストリアらしいの」
「そうなの？」
「もちろん、それだけが理由じゃないけどね。

一番の理由はコンテ・ディ・カブール級の改良型であるカイオ・ドゥイリオが竣工したからだと思う。
これで弩級戦艦数を五分五分に戻したイタリアは、すぐ近くに駐在する私たちに助っ人として参加を呼びかけ、
一気に攻勢に出るって魂胆なのではないかしら？」
「なるほどね。だけど、私たちに頼むのなら、フランスに頼むって手もあるんじゃない？」

摂津は地図を見ながら発言する。
明石はこの裸で佇む少女になかなかの洞察力があるのを感心し、答えを挟む。

「それは難しいと思います」
「え？　どうして？」
「たしかにフランスもクールベ級という弩級戦艦を持っていますので、助っ人には成り得ます。
しかし、イタリアとしてはここでフランスに借りを作ってしまうと、後々厄介だと考えられます。
今は同じ連合国側として一緒にいますが、それが何時までかは解りません。
突然、敵同士になる事も充分考えられるのです。
国同士が間近で接していると、いろいろと柵（しがらみ）があって大変なのですよ。
その点日本ならヨーロッパから遠く離れてますから、考慮する事が少なく頼み易いのでしょう」

その辺りの事情は、かって明石が日露戦争を前にして散々苦労させられたところである。
そして戦争終結後、今度は鹵獲したロシア艦の艦魂たちとの調整に手を焼く事になる。

だから、言う事に現実味が溢れていた。

「だけど、助っ人として利用されるだけってのは癪に触るよ。こっちだって命張るんだし、何か貰わないと」

「その通りです。こちらも得るものがないと割に合いませんよね」

結局、艦魂の三人が話し合った事は現実のものとなった。

河内と攝津はイタリア艦隊に組してアドリア海に向かい、そこでオーストリア艦隊と争う事になったのだ。

第9話　新たなる動き（下）（後書き）

「みなさん、はじめまして！　この作品の主人公、戦艦「摂津」の艦魂である摂津で・・・うわぁぁぁぁぁ！」
「どうした摂津。突然大声を出したら読者様が驚くだろ」
「ねえ作者！　私、すっぽんぽんのままじゃないかぁ！」
「ああ、そうだが、何か？」
「わ、私だって女の子なんだよ！　読者様の前でこの格好は恥ずかしいよ！」
「今更何を言っとるか。お前はヒロインとして、そうなる宿命にあったのだ」
「すっぽんぽんになるのが宿命なの？　そんなの嫌だよ！」
「私の作品においては、そうならないとヒロインとは言えないのだ。いわばデフォ！」
「そんなのがデフォだったら、私、ヒロインやりたくない！」
「摂津、君は艦魂だろ？」
「うん、そうだけど、いきなりそれがどうしたのさ？」
「艦魂というのは、その艦（ふね）に宿る精霊みたいなものだ。違うか？」
「一般にはそう言われているね」
「精霊は何も身に着けないのが普通だ。だから摂津も裸でいる事に何ら問題無い。ノープロブレム！」
「何なのよ！　その理屈！」
「よって摂津は最終回まで裸でいる事に決て・・・」

ズズゥーン！

「摂津は自業自得にしても、横暴すぎはしませんか？　作者様」
「をいっ河内、いきなり何をするんだ！」
「艦魂というのは、多くの先輩作家先生方が描き育んできた独自の

様式というのがあるのです」
「そうだそうだ！　お姉ちゃんがんばれ！」
「だから何だというのだ？」
「その様式を崩すという事は、他の先生方にも迷惑が掛かるというものです」
「迷惑って何？　美味しいの？」
「ここに来てまだ惚けるつもりですか？　もう一度３０．５ｃｍ砲１２門の一斉射を食らいますか？」
「私のと合わせて２４門一斉射でも良いよ！」
「ま、待て！　他の先生方だって独自の艦魂像をいろいろと描かれているではないか！」
「それは優れた文章力に裏打ちされてのものです。作者様にそれがお有りですか？」
「ううっ・・・　し、しかし、文章力はともかく、物事には革新が必要だ！」
「裸になるのが革新的とでも？」
「ああそうだ。究極の美とは女性の裸身にあるという。お前たちの裸身が艦魂界のドレッドノートに・・・」
「摂津、もう一斉射いきますよ！」
「うん、お姉ちゃん！」

ズズズズゥゥーン！

河内級戦艦のライバル達ー各国弩級戦艦データ集（前書き）

今回は物語の続きではなく、表題の通り河内級と同クラスの各国弩級戦艦のスペックを集めてみました。
元々は前回第９話中に出てきたイタリアやオーストリアの弩級戦艦のスペックを後書き欄に載せるつもりで用意していたのですが、「いっその事、各国全て集めてしまえ！」となり、量が増えた結果、別ページを設けさせていただいた次第です。
又、この集めたデータを参考にして、物語における中心メカＷともいうべき河内級戦艦のスペックも決めさせていただきました。
読者様が、この作品を読むに当たって手助けとなれば幸いです。

河内級戦艦のライバル達－各国弩級戦艦データ集

（日）河内級戦艦　（□内が史実値）
同型艦：河内（Ｋａｗａｃｈｉ）、摂津（Ｓｅｔｔｓｕ）
排水量：２４，０００ｔ［２０，８００ｔ］（常備）
全長：１９２．０ｍ［１６０．３ｍ（河内）／１６２．５ｍ（摂津）］
全幅：２５．８［２５．６ｍ］
吃水：８．２ｍ［８．２ｍ］
最大出力：４５，０００ｈｐ［２５，０００ｈｐ］
最大速力：２４．３ｋｔ［２０ｋｔ］
航続距離：１０ｋｔ／６，５００海里［１８ｋｔ／２，７００海里］
乗員：１０２０名［９９９名］
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝５０）連装砲６基［（Ｌ＝５０）連装砲２基＋（Ｌ＝４０）連装砲４基］１２門
１４ｃｍ（Ｌ＝５０）単装砲１４基［１５．２ｃｍ（Ｌ＝４５）単装砲１０基、１２ｃｍ（Ｌ＝４０）単装砲８基］
７．６ｃｍ（Ｌ＝４０）単装砲８基［同１２基］
４５ｃｍ水中魚雷発射管なし［同５基］
装甲：２８０ｍｍ［３０５ｍｍ］（艦舷）、１００ｍｍ［７６ｍｍ］（甲板）、２８０ｍｍ［３０５ｍｍ］（主砲前盾）

（伊）ダンテ・アリギエーリ（Ｄａｎｔｅ　Ａｌｉｇｈｉｅｒｉ）
同型艦：なし
排水量：１９，５００ｔ（基準）／２１，８００ｔ（常備）
全長：１６８．１ｍ
全幅：２６．６ｍ

吃水：８．８ｍ
最大出力：３２，０００ｈｐ
最大速力：２３ｋｔ
航続距離：１０ｋｔ／５０００海里
乗員：９７０名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝４６）三連装砲４基１２門
１２ｃｍ（Ｌ＝５０）連装速射砲４基、単装速射砲１２基
７．６ｃｍ（Ｌ＝４０）単装速射砲１３基
４５ｃｍ水中魚雷発射管３基
装甲：２００～２５４ｍｍ（艦舷）、３８ｍｍ（甲板）、２５４ｍｍ（主砲前盾）

（伊）コンテ・ディ・カブール級戦艦
同型艦：コンテ・ディ・カブール（Ｃｏｎｔｅ　ｄｉ　Ｃａｖｏｕｒ）、ジュリオ・チェザーレ（Ｇｉｕｌｉｏ　Ｃｅｓａｒｅ）
レオナルド・ダ・ヴィンチ（Ｌｅｏｎａｒｄｏ　ｄａ　Ｖｉｎｃｉ）

排水量：２３，０８８ｔ（基準）／２５，０８６ｔ（常備）
全長：１７６．９ｍ
全幅：２８ｍ
吃水：９．５ｍ
最大出力：３１，０００ｈｐ
最大速力：２１．５ｋｔ
航続距離：１０ｋｔ／４，８００海里
乗員：１，０００名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝４６）三連装砲３基＋連装砲２基１３門
１２ｃｍ（Ｌ＝５０）単装速射砲１８基
７．６ｃｍ（Ｌ＝５０）単装速射砲１３基＋（Ｌ＝４０）単装速射砲６基

45cm水中魚雷発射管3基
装甲：130～220～250mm（艦舷）、80mm（甲板）、280mm（主砲前盾）

（伊）カイオ・ドゥイリオ級戦艦
同型艦：カイオ・ドゥイリオ（Caio Duilio）、アンドレア・ドリア（Andrea Doria）
排水量：22，964t（基準）／25，216t（常備）
全長：176．1m
全幅：28m
吃水：9．5m
最大出力：32，000hp
最大速力：21．5kt
航続距離：10kt／4，800海里
乗員：1，000名
兵装：30．5cm（L＝46）三連装砲3基＋連装砲2基13門
15．2cm（L＝45）単装砲16基
7．6cm（L＝50）単装速射砲13基＋（L＝40）単装速射砲6基
4cm（L＝39）機砲2基
45cm水中魚雷発射管2基
装甲：250mm（艦舷）、97mm（甲板）、280mm（主砲前盾）

（墺）フィリブス・ウニティス級戦艦
同型艦：フィリブス・ウニティス（Viribus Unitis）、テゲトフ（Tegetthoff）
プリンツ・オイゲン（Prinz Eugen）、セント・イシュ

トヴァン（Ｓｚｅｎｔ　Ｉｓｔｖａｎ）
排水量：１９，６９８ｔ（基準）／２１，５９５ｔ（常備）
全長：１５１．４ｍ
全幅：２７．３ｍ
吃水：８．２ｍ
最大出力：２７，０００ｈｐ
最大速力：２０．３ｋｔ
航続距離：１０ｋｔ／４，２００海里
乗員：１，０８７名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝４５）三連装砲４基１２門
１５ｃｍ（Ｌ＝５０）単装速射砲１２基
６，６ｃｍ（Ｌ＝５０）単装速射砲１８基
５３，３ｃｍ水中魚雷発射管４基
装甲：２８０ｍｍ（艦舷）、３６ｍｍ（１８ｍｍ×２）（甲板）、
２８０ｍｍ（主砲前盾）

（仏）クールベ級戦艦
同型艦：クールベ（Ｃｏｕｒｂｅｔ）、フランス（Ｆｒａｎｃｅ）
ジャン・バール（Ｊｅａｎ　Ｂａｒｔ）→オセアン（Ｏｃｅａｎ）、
パリ（Ｐａｒｉｓ）
排水量：２２．１８９ｔ（基準）／２３，４７５ｔ（常備）
全長：１６８．０ｍ
全幅：２７．９ｍ
吃水：９．０ｍ
最大出力：２８，０００ｈｐ
最大速力：２１．０ｋｔ
航続距離：１０ｋｔ／４，２００海里
乗員：１，１００名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝４５）連装砲６基１２門

１３．９ｃｍ（Ｌ＝５５）単装速射砲２２基
４７ｍｍ機関砲４基
４５ｃｍ水中魚雷発射管４基
装甲：１８０ｍｍ～２７０ｍｍ（艦舷）、１１２ｍｍ（３０＋３０＋１２＋４０）（甲板）、３２０ｍｍ（主砲前盾）

（英）エジンコート（Ａｇｉｎｃｏｕｒｔ）
リオデジャネイロ（Ｒｉｏ　ｄｅ　Ｊａｎｅｉｒｏ）（伯）→スルタン・オスマン１世（Ｓｕｌｔａｎ　Ｏｓｍａｎ　Ｉ）（土）→エジンコート（Ａｇｉｎｃｏｕｒｔ）（英）
同型艦：なし
排水量：２７，５００ｔ（基準）
全長：２０４．７ｍ
全幅：２７．１ｍ
吃水：８．２ｍ
最大出力：３４，０００ｈｐ
最大速力：２２．０ｋｔ
航続性能：１０ｋｔ／４，５００海里
乗員：１，１１５名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝４５）連装砲７基１４門
１５．２ｃｍ（Ｌ＝５０）単装砲２０基
７．６ｃｍ（Ｌ＝４５）単装砲２０基＋高角砲２基
５３．３ｃｍ水中魚雷発射管３基
装甲：２２９ｍｍ（艦舷）、６４ｍｍ（甲板）、３０５ｍｍ（主砲前盾）

（米）ワイオミング級戦艦
同型艦：ワイオミング（Ｗｙｏｍｉｎｇ，　ＢＢ－３２）、アーカ

ンソー（Ａｒｋａｎｓａｓ，　ＢＢ－３３）
排水量：２７，２４３ｔ（基準）
全長：１７１．３ｍ
全幅：２８．４ｍ
喫水：８．６６ｍ
最大出力：２８，０００ｈｐ
最大速力：２０．５ｋｔ
航続距離：１２ｋｔ／５，１９０海里
乗員：１，０６３名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝５０）連装砲６基１２門
１２．７ｃｍ（Ｌ＝５１）単装速射砲２１基
５３．３ｃｍ水中魚雷発射管２基
装甲：２７９ｍｍ（艦舷）、３８～７６ｍｍ（甲板）、３０５ｍｍ
（主砲前盾）

（独）ナッソー級戦艦
同型艦：ナッソー（Ｎａｓｓａｕ）、ヴェストファーレン（Ｗｅｓｔｆａｌｅｎ）
ラインラント（Ｒｈｅｉｎｌａｎｄ）、ポーゼン（Ｐｏｓｅｎ）
排水量：１８，５７０ｔ（基準）／２１，０００ｔ（常備）
全長：１３７．７ｍ
全幅：２６．９ｍ
吃水：８．１ｍ
最大出力：２２，０００ｈｐ
最大速力：１９．５ｋｔ
航続距離：１０ｋｔ／８，０００海里
乗員：１，０００名
兵装：２８．３ｃｍ（Ｌ＝４５）連装砲６基１２門
１５ｃｍ（Ｌ＝４５）単装速射砲１２基

８．８ｃｍ（Ｌ＝４５）単装速射砲１６基（１９１５年に全撤去）
７．６ｃｍ（Ｌ＝４０）単装速射砲６基
４５ｃｍ水中魚雷発射管３基
装甲：３００ｍｍ（艦舷）、５５ｍｍ（甲板）、２８０ｍｍ（主砲前盾）

（独）ヘルゴラント級戦艦
同型艦：ヘルゴラント（Ｈｅｌｇｏｌａｎｄ）、オストフリースラント（Ｏｓｔｆｒｉｅｓｌａｎｄ）
チューリンゲン（Ｔｈｕｒｉｎｇｅｎ）、オルデンブルク（Ｏｌｄｅｎｂｕｒｇ）
排水量：２２，８００ｔ（常備）
全長：１６７．２ｍ
全幅：２８．５ｍ
吃水：８．８１ｍ
最大出力：２８，０００ｈｐ
最大速力：２０．５ｋｔ
航続距離：１８ｋｔ／３，６００海里
乗員：１，１１０名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝５０）連装砲６基１２門
１５ｃｍ（Ｌ＝４５）単装砲１４基
８．８ｃｍ（Ｌ＝４５）単装砲１４基
５０ｃｍ水中魚雷発射管６基
装甲：３００ｍｍ（艦舷）、８０ｍｍ（甲板）、３００ｍｍ（主砲前盾）

（露）ガングート級戦艦
同型艦：ガングート（Ｇａｎｇｕｔ）→オクチャブリスカヤ・レヴ

ォリューツィヤ（Ｏｋｔｙａｂｒｓｋａｙａ　Ｒｅｖｏｌｕｔｓｉｙａ）
ペトロパブロフスク（Ｐｅｔｒｏｐａｖｌｏｖｓｋ）→マラート（Ｍａｒａｔ）
ポルタワ（Ｐｏｌｔａｖａ）→ミハイル・フルンゼ
セバストポリ（Ｓｅｖａｓｔｏｐｏｌ）→パリジスカヤ・コンムナ（Ｐａｒｉｚｈｓｋａｙａ　ｋｏｍｍｕｎａ）
排水量：２３，３６０ｔ（基準）／２５，４６６ｔ（常備）
全長：１８１．２ｍ
全幅：２６．６ｍ
吃水：８．４ｍ
最大出力：４２，０００ｈｐ
最大速力：２３．４ｋｔ
航続距離：１０ｋｔ／５，０００海里
乗員：１，１２６名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝５２）三連装砲４基１２門
１２ｃｍ（Ｌ＝５０）単装速射砲１６基
４．７ｃｍ（Ｌ＝４３．５）単装速射砲４基
４５．７ｃｍ水中魚雷発射管４基
装甲：２２９ｍｍ（艦舷）、２５～３７～７６ｍｍ（甲板）、２０３ｍｍ（主砲前盾）

（露）インペラトリッツァ・マリーヤ級戦艦
同型艦：インペラトリッツァ・マリーヤ（Ｉｍｐｅｒａｔｒｉｔｓａ　Ｍａｒｉａ）
インペラトリッツァ・エカテリーナ２世→インペラトリッツァ・エカテリーナ・ヴェリーカヤ
→スヴォボードナヤ・ロシヤ
インペラートル・アレクサンドル３世→ヴォーリャ→ゲネラル・ア

レクセーエフ
インペラートル・ニコライ1世（Ｉｍｐｅｒａｔｏｒ　Ｎｉｋｏｌａｉ　Ｉ）（未完）
排水量：２２，６００ｔ（常備）
全長：１６７．８ｍ
全幅：２７．３ｍ
吃水：８．４ｍ
最大出力：２６，５００ｈｐ
最大速力：２１ｋｔ
航続距離：１６ｋｔ／２，６００海里
乗員：１，２２０名
兵装：３０．５ｍ（Ｌ＝５２）三連装砲４基１２門
１３ｃｍ（Ｌ＝５５）単装速射砲２０基
７．５ｃｍ（Ｌ＝５０）単装砲４基
４．７ｃｍ（Ｌ＝４３．５）単装速射砲４基
４５．７ｃｍ水中魚雷発射管４門
装甲：２６７ｍｍ（艦舷）、７６ｍｍ（甲板）、３０５ｍｍ（砲塔前盾）

（伯）ミナス・ジェライス級戦艦（イギリス製）
同型艦：ミナス・ジェライス（Ｍｉｎａｓ　Ｇｅｒａｉｓ）、サン・パウロ（Ｓａｏ　Ｐａｕｌｏ）
排水量：１９，２８１ｔ（常備）
全長：１６５．５ｍ
水線長：１６１．５ｍ
全幅：２５．３ｍ
吃水：７．６ｍ
最大出力：２３，５００ｈｐ
最大速力：２１ｋｔ

航続距離：１０ｋｔ／１０，０００海里
乗員：９００名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝４５）連装砲６基１２門
１２ｃｍ（Ｌ＝５０）単装速射砲２２基
７．６ｃｍ（Ｌ＝４０）単装砲２基
４．７ｃｍ（Ｌ＝４３）単装砲８基
装甲：２２９ｍｍ（艦舷）、５２ｍｍ～３０ｍｍ（甲板）、３０５ｍｍ（主砲前盾）

（亜）リバタビア級戦艦（アメリカ製）
同型艦：リバダビア（Ｒｉｖａｄａｖｉａ）、モレノ（Ｍｏｒｅｎｏ）
排水量：２７，７２０ｔ（基準）／２７，９４０ｔ（常備）
全長：１８２．３ｍ
全幅：３０．０ｍ
吃水：８．５　ｍ
最大出力：４０，０００ｈｐ
最大速力：２２．５ｋｔ
航続距離：１０ｋｔ／８，５００　海里
乗員：１，１３０　名
兵装：３０．５ｃｍ（Ｌ＝５０）連装砲６基１２門
１５．２ｃｍ（Ｌ＝５０）単装砲１６基
１０．２ｃｍ（Ｌ＝５０）単装砲１６基
５３．３ｃｍ水中魚雷発射管２基
装甲：３０５ｍｍ（艦舷）、７６ｍｍ（甲板）、３０５ｍｍ（主砲前盾）

各国略号は以下の通り

（日）大日本帝国　（伊）イタリア王国　（墺）オーストリア＝ハンガリー帝国　（仏）フランス共和国　（英）大英帝国

（米）アメリカ合衆国　（独）ドイツ帝国　（露）ロシア帝国　（伯）ブラジル共和国　（亜）アルゼンチン共和国

（土）オスマン帝国

河内級戦艦のライバル達ー各国弩級戦艦データ集（後書き）

艦魂たちと作者のダベりコーナー（２）

「これらが全部、私やお姉ちゃんのライバルとなる弩級戦艦なの？
随分と多いんだね」
「ああ、３０．５ｃｍ（ナッソー級のみ２８．３ｃｍ）砲１２門以上搭載の弩級戦艦だけに限ってもこれだけある。
具体的に数字で言えば１０ヶ国１４クラス３８隻だ。
面白い事に、あれだけ戦艦を保有していたイギリスがエジンコート１隻しかない事。
主砲数を１０門にすれば、弩級戦艦の始祖ドレッドノートをはじめ、いくつかあるのだけど。
エジンコートとて、元はミナス・ジェライス級と同じくブラジル向けだから、純粋な本国用としては
一隻も無い事になる。ま、既に本国用のは超弩級戦艦に移行したからだろうけど」
「なるほどね」
「それで摂津は、自分の片身のデータを史実と較べてみてどう思った？」
「全長が長くなってるね」
「そうだな。全長は六つの主砲塔を艦首尾線上に並べる様にした以上、どうしても長くなる。
元の河内級はドイツの二クラスと同じく亀甲型配置で、ちょっと時代遅れな配置だからね」
「最大速力２４．３ノットもこの中では最速だね。凄い凄い！」
「その通り。これだけの速力を得る為には機関部も大きくしなくてはならないので、全長は更に伸びる。
当初は１８７ｍあれば充分と思ってたけど、更に５ｍ伸ばしてみた」

「縦横比（全長と全幅の比率）が7以上、巡洋戦艦並みですね」
「さすが河内、良いところに目を付けたな。そう、この世界の河内級はちょっとした巡洋戦艦なんだ」
「巡洋戦艦だって言うのならもっと速くして欲しかったよ。３０ノットくらい出る様に！」
「でも、巡洋戦艦みたいに装甲が薄くては心配です」
「ところが、二人のこの相反した意見を満たすとなると、艦体は必然的に大きくなってしまう。
この物語は未来からの知識や技術が関与した架空戦記だから、史実よりハイスペックな艦を建造する事は
もちろん可能だ。でも、出来合いの物を未来から持って来るならいざ知らず、この時代で建造するのなら、
自ずと限界が見えてくる。製造技術や部品の精度とかが劣っているだろうからね。
図面を与えたところで、一朝一夕には作れないんだ。
ましてや戦艦建造といったら国家規模のプロジェクトだ。多くの人の手が必要となる。
決して一握りの優れた者がいれば完成に至るものではない。それはその後の運用においても同じだ。
それから懸念すべきは、凌駕する能力を持つものが現れると、必ずや他もやがては追従する事。
ドレッドノートが出現すると、各国もこぞって弩級戦艦を建造し、後に続いたのと同じ様にね。
あまりにハイスペックだと製造出来ないし、かといって生半可では直ぐに追い着かれるし。
この兼合いが難しいんだ。
もちろん架空戦記と割切って、超絶無敵の戦艦が敵を叩き潰すのも爽快で良いかもしれないけど」
「その妥協点が２４ノットなのですか？」
「うん、この値は当時の最優良戦艦と言われているクイーン・エリ

ザベス級と同じだ。
一門当りの砲力では劣るが、こちらは１２門、さほど見劣りはしないはず。
装甲厚も艦舷や主砲前盾は一般的だが、その分甲板部を増やしてバランスをとっているし」
「でも、門数で対抗しようとすれば砲塔数が多くなり、誘爆の危険性があるのでは？」
「たしかに砲塔数が多くなれば、その危険性は否定出来ない。全長も長くなる結果となるし。
だけど、連装多砲塔こそが日本戦艦だよ。これだけは三連装なんかに妥協はさせない！」　キリッ！
「それでしたら、私たちの艦容は扶桑級戦艦を小ぶりにした様との事にも関係しますか？」
「うん、この世界の扶桑級が未来からの後追い知識で、いろいろ問題の多かった史実の扶桑級ではなく
改良型の伊勢級に近くなるので、その代わりという意味合いもあってね。
あ、それから、副砲は従来の１５．２ｃｍ砲では小柄な日本人には扱いが大変だと言う事で、
伊勢級から１４ｃｍ砲になったけど、ここでは既にお前たち河内級からそうなっている。
同時に魚雷発射管も必要無しとして当時の戦艦では珍しく装備していない」
「はぁ～　問題の多い扶桑級の代わりでしたら、もしかしてあの艦橋もですか？」
「ははは、あのひょろりと高くて括れた艦橋は愛好者が多いよね。
だけど、将来的にはともかく、今は司令塔と三脚檣上の射撃指揮所といったものしかないよ。
考えてみれば解るだろうけど、扶桑級のあの艦橋だって最初からあだった訳ではない。

いろいろと改良を加えていく内に、どんどんと上に伸びていった結果だ。
いわば艦齢と共に積み重ねられてきた造形美と言っても良い。それを単に模倣するだけでは冒涜だよ」
「う～ん、何だか話を聞いていると、私たちってタダの普通の戦艦なんだね。がっかりだよ・・・」
「ほんとね。未来からの知識や技術が加わってどれだけ凄いかと思えば。やる気が無くなってきたわ」
「ちょっ、ちょっと二人共、落胆する気持は解るけど、さっきも言った通り、あまり他国を刺激して競争心を
起させるのは、マズいんだって。特にお前たちは欧州に派遣された事で、他国と接する機会も多い。
そのあたりの事情を理解してほしいぞ」
「それは思わないでもないですが、作者様、他国はともかく、前回と今回との発言で、
多くの架空戦記作家様を敵に回しましたよ」
「それはどういう事だ。河内？」
「前回の『艦魂素っ裸論』とか、今回の『未来知識は即効しない』や『扶桑の艦橋冒涜論』ですよ。
私が知っている内でも、あの方には完全に逆鱗に触れましたね。あの方もそうかも・・・」
「をいっ！　私はただ持論を言ったまでだぞ！」
「ま、せいぜい、後から刺されてこの作品が絶筆にならない様にしてくださいね。作者様ｗ」

第１０話　皇太子の憂鬱

「つまんないですね・・・」

彼女はそう呟き、その美麗な顔をいささか歪める。
金砂のごとくさらさらと輝く腰の近くまで届く長い髪も、今は少しばかり色褪せてきているが、高めの背丈に
端正な容姿は、以前と変わりはしない。

「でもぉ、日本の人たちは本当に良くしてくださいますよぉ・・・」

間延びした喋り方で、別の女性が答える。
先の女性と同じくこちらも金髪だが、茶色味が強いその髪は嵐の様に激しく波打っている。
顔立ちからするに、彼女の方が若干歳上の様らしい。
そして、その喋り方に合わせるかの様に、ひょろりと背が高い。１７０ｃｍはありそうだ。

「だけどさ。あたいや姉御たちは、その日本人たちに散々やられたんだぜ。お前を含めてな」

三人目が荒っぽい口調で話に割込む。
何故か黒いピケ帽（フランス陸軍御用達の頂部が平らな円筒型の帽子）を被っており、二人目ほどでないが、
やはりウェーブが掛かった金髪を覗かせている。
彼女はその帽子をあみだに被り直してもう一人のウェーブ女性を睨んだ。

「そんな事を言っても、あの時は敵と味方に別れていたのだから、

仕方ないじゃないのぉ」

相変わらず間延びした話し方で反論する。
最初の彼女は、二人の口論のどちらに加勢する訳でもなく再び呟く様に言う。

「たしかに日本人たちが、今の私たちに行ってくれる処遇は悪くないですよ。
ただ、私が我慢ならないのはですね・・・」

彼女がそう言い掛けた時だった。

「お～い！　若狭いるか？」

光に包まれながら、もう一人の女性が姿を現す。
この彼女は赤毛で、白いリボンにより後頭部で纏めている。いわゆるポニーテールという髪型だ。
赤毛と白いリボンの対比が良く映えており、髪の色と型から快活な印象を受ける。

「その名前で呼ぶのは止めてくれと言っているではないですか。レト」

若狭と呼ばれた彼女は、その青い瞳で赤毛の女性を睨む。

「お前こそ、いいかげん今の名前に慣れろよ。もう１０年経つんだぜ。ツェザ」

赤毛の彼女も負けずに言い返す。

「私は最初の”皇太子（ツェザレーヴィチ）”という名前が気に入っているのですよ」

彼女は口を尖らせ、自分に言い聞かせるかの様に答える。

三人の金髪女性に加えて、赤毛の女性が居る場所は日本。

正確には大日本帝国海軍戦艦「若狭」の士官用個室の一室であった。

しかし、彼女たち四人は、その髪の色からも解る通り、日本人の風貌とは明らかに異なっている。

そもそもこの彼女たちが、戦艦内の部屋という女人禁制の場所に居る事自体が奇妙なのだが、それ以上

なのは、四人が揃って帝国海軍の軍装をその身に纏っている点である。

実は赤毛の女性が光に包まれて現れた事からも想像がつくだろうが、人間の姿をしていながらも人間とは

異なる存在ー艦魂　それが彼女たちの正体であった。

「しかし、気に入っているかいないかは別問題であって、我々は敗れて鹵獲された身なんだ。

郷に入ったら郷に従えで、それに合わせるのが道理なんじゃないか？

実際、日本人たちは私たちの新しい名前に結構気を遣っていると思うぞ。

私の肥前には佐世保があり、お前の若狭には舞鶴という軍港がある。

これは旅順（ポルト・アルトゥール）やウラジオストクに匹敵するもんだぜ」

今は肥前となった赤毛の艦魂ーレトヴィザンに諭され、若狭ーツェザレーヴィチは、彼女の出現で途切れた

話をもう一度語り出す。

「たしかに日本人たちが、今の私たちに行ってくれている処遇は悪くはないですよ。

ただ、私が我慢ならないのはですね、あの横柄な態度でのさばる卑しき英国艦魂（アルビオン）どもなんですよ。
奴らときたら紅茶を啜（すす）るばかりで、料理の腕ときたら、からきし駄目なんですからね！」

フランス生まれで元ロシア太平洋艦隊所属の戦艦の艦魂ーツェザレーヴィチは、いささが語調を荒げて言う。
一般的に言ってもイギリスとフランスの仲は元来から良くない。表面上では協力するかに見せ掛けて、
腹の中では相手を貶める策謀を持っているのではと、常々警戒をしている。
日露戦争は日本とロシアの争いであったが、それぞれの海軍が範としたのはイギリスとフランスであり、
こと海軍力に関しては、両国の代理戦争の趣きがあった。
このイギリス憎しの感情は、艦魂のＤＮＡ（そんなものがあるのか解らないが）に至るまで刻み付けられて
いるのか、部屋に居る残り二人のフランス生まれの金髪艦魂ー元より日本海軍所属で間延びした話し方を
する装甲巡洋艦「吾妻」や、同じく装甲巡洋艦で、ツェザレーヴィチの妹分に当たり、ピケ帽をこよなく愛する
バヤーン（現「雲仙」）にしても、彼女ほどではないにしても、イギリスを快くは思ってなかった。

「お前とは旅順（ポルト・アルトゥール）で寝食を共にした戦友だから、気持は解らんでもないが、今更どうしようもないだろ。
それに、私がこの前まで一緒していた装甲巡洋艦の出雲なんかは、話してみると努力家で、なかなか
良い奴だったぞ」

レトヴィザンは、ツェザレーヴィチの言う事に「またか」と、うん

ざりした気分になりながら答える。
かと言って彼女を中心とするアメリカを故郷とする艦魂たちの状況も、ツェザレーヴィチらフランス勢と
ほぼ同じだった。
即ち、仁川港で自沈し亡くなったと諦めていたところ、その後日本軍によって浮揚・修復された事で、
思いがけず涙の再会を果たした妹分の防護巡洋艦ヴァリャーグ（現「宗谷」）や、吾妻と同じく元から
日本艦隊所属の防護巡洋艦姉妹である笠置と千歳。この四人だけなのだから。

「レトは日本人に受けが良いですからね。
あの『べいすぼー』とかいう木棒とボールを使った奇妙な武術訓練なんかをして御機嫌をとってますしね」
「『ベースボール』だ。あれは武術訓練じゃない。単なる艦魂同士の親睦の為だ。何度も言わせるな！」

レトヴィザンが憤慨して言うのは、もちろん日本で言うところの野球の事である。
元々はアメリカ生まれの彼女が、旅順艦隊所属の駆逐艦艦魂たちとの親睦を図る為に始めたのであるが、
当の駆逐艦艦魂たちは意味するところが解らず、ただ迷惑なだけだった。
その点、日本では野球というスポーツの認知度は高く、日本艦隊編入後は、同じアメリカ生まれの防護巡洋艦
三人に、駆逐艦連中を交えて、このスポーツに興じる彼女の姿が度々見られている。
ちなみに、アメリカからグレート・ホワイト・フリートが来航した際は、義妹であるメイン級姉妹たち（レトヴィザンの
設計を元にして、アメリカではメイン級戦艦三隻を建造した。金剛

級に対するタイガーに相当）と再会を果たすと
共に、この野球の試合を行ったらしい。結果はキャリアの差から惨敗したらしいが。

「それに先日まで、日本に忠誠である事の御褒美に、生まれ故郷にも返してもらえましたしね。
私も欧州派遣の際には、あの河内と攝津の姉妹と共に連れて行ってほしかったですよ」
「あれは、自分の国で建造した戦艦で行くなら相手（アメリカ）も安心するだろうという配慮からだけだ。
それに遊びで行った訳ではないぞ。あくまでも警戒活動としてだ。
何を拗ねて突っ掛かってくるんだ？」
「別に拗ねてなんかいませんよ」

ツェザレーヴィチは平然と言い放つが、拗ねているのは事実である。
その原因は二人の片身である戦艦「ツェザレーヴィチ」と「レトヴィザン」の建造事情にある。
二艦はロシア海軍が、次期国産主力戦艦建造の際のサンプルとして、フランスとアメリカに競争発注したものだ。日本でいえば、巡洋戦艦金剛級建造の際、最初の一艦「金剛」をイギリスに発注した事と似ている。
建造に当たっては、仮想敵国と見なしていた日本のイギリス製敷島級戦艦を多分に意識したものとなり、
結果は、以前からの繋がりも考慮してなのだろうが、フランス製の「ツェザレーヴィチ」に軍配が上がった。
そして、それをほぼコピーする形で、バルチック艦隊でも旗艦を務めた「クニャージ・スワロフ」をはじめ、
主力を成すボロジノ級戦艦五隻を国内で建造するに至る。
だから、ツェザレーヴィチにはロシア海軍最高艦という自負があった。

しかし、彼女単艦では優れていても、それを国産化したボロジノ級
（彼女からすれば義理の妹たちに当たる
訳だが）は、建造からしてロシア人の手に負えるものではなかった。
数々の問題が噴出する欠陥戦艦になってしまったのだ。
その原因の一端として、タンブルホーム型という当時のフランス製
軍艦独自の艦体形状がある。
これは艦舷が内側に向って優美な曲線を描くもので、アイロンの形
を想像していただければ解り易い。
浮かぶ巨大なアイロンという訳だ。
この艦型は砲の射界が大きく取れる反面、甲板面積が小さくなり、
そこに建造物を配置すればトップヘビーに
陥りやすい欠点があった。
ツェザレーヴィチでは、そのあたりのバランスが保たれていたが、
ボロジノ級ではそうはいかなかった。
そして、これは後に鹵獲した日本とて同じだった。
ボロジノ級戦艦五隻の内、末妹の「スラヴァ」を除く「ボロジノ」
「インペラトル・アレクサンドル三世」
「オリョール」「クニャージ・スワロフ」の四隻がバルチック艦隊
の主力として日本海海戦に臨み、三隻が戦没、
かろうじて「オリョール」だけが生き残り、日本はこれを鹵獲した
のであるが、損傷が激しく修復に多額の費用が
かかる事に加え、この特異な艦型が仇となり、結局は戦艦としての
機能を保持したままの復活は諦めてしまい、
外形だけの修繕に留め、さっさと戦利記念艦にしてしまった。
これは元となった「ツェザレーヴィチ」も同じで、黄海海戦に敗れ、
旅順港に逃げ戻った後、「レトヴィザン」らと
共に頓挫しているところを日本に鹵獲されたのだが、多数を占める
イギリス製軍艦に慣れている日本海軍に
とっては使い辛い存在であり、その点では同じ鹵獲艦でも「レトヴ
ィザン」の方が遥かに使い勝手が良く、

大戦が勃発すると早々に、遺米艦隊と称してイギリス製装甲巡洋艦
「出雲」「磐手」と組み、アメリカ本土は
元より、遠く南米まで足を運ぶ活躍を見せたのは、二人の会話にも
ある通りである。
一方、「ツェザレーヴィチ」の方は出撃する事も少なく、港に係留
されての日々を送るという、明暗を分ける
結果となった。
ライバルの「レトヴィザン」に勝ったと思っていたのが、最終的に
は負けてしまったのである。
これはツェザレーヴィチのプライドを傷付ける事となった。
そして、彼女だけに留まらず、妹分であるバヤーンもこれと同傾向
にあり、元から日本艦隊所属である吾妻に
しても、艦型こそ普通であるが、全長が１３５．９ｍと戦艦より長
く（三笠で１３１．７ｍ）、収納出来るドッグが浦賀
だけしか無いという、こちらも使い勝手の面で劣っていた。
そういう訳で、出撃命令の少ないフランス生まれの艦魂三人は、ツ
ェザレーヴィチの自室に集い、
時にはワインや清酒を酌み交わしながら、悶々と過ごしているのだ
った。

ツェザレーヴィチは、レトヴィザンをもう相手にせず、腰に手を掛
け、自分の軍刀を鞘から抜くと、
刀身を磨き始めた。金属磨きは以前から彼女の趣味なのだ。
ロシア海軍時代はサーベルだったが、日本海軍に編入された際に没
収され、今は日本刀を模した軍刀と
なったが、対象は変われども、これがなかなか楽しい事らしい。他
に愛用の拳銃を磨く場合もある。
そしてふと思い出した様にレトヴィザンを見て尋ねた。

「ところで、私の部屋に来るという事は、何か用事があったのでは

ありませんか？」

それを聞いて、レトヴィザンも本来の目的を思い出した様だ。

「ああ、そうだった。いきなりお前と口論となったから忘れていたよ。

実は丹後たちを祖国に帰すという事を耳にしたのだが、何か知っているか？」

赤毛の艦魂の問いに、彼女の青い瞳も光る。

「ポルタワたちの事ですね。ええ、うっすらとですけどね。何でも親善の証として返すのだとか・・・」

ここで日露戦争において鹵獲したロシア艦艇を挙げてみる。

旅順（ポルト・アルトゥール）を本拠地としていた太平洋艦隊は、一網打尽にした格好となり、鹵獲した艦艇数はかなり多い。

○戦艦

ツェザレーヴィチ（Ｔｓｅｓａｒｅｖｉｃｈ）→若狭（史実では青島まで逃走し鹵獲無し）

レトヴィザン（Ｒｅｔｖｉｚａｎ）→肥前

ポルタワ（Ｐｏｌｔａｖａ）→丹後

セヴァストポリ（Ｓｅｖａｓｔｏｐｏｌ'）→但馬（史実では旅順港外で自沈。鹵獲無し）

ペレスヴェート（Ｐｅｒｅｓｖｙｅｔ）→因幡（史実では相模）

ポベーダ（Ｐｏｂｙｅｄａ）→周防

○装甲巡洋艦

バヤーン（Ｂａｙａｎ）→雲仙（史実では阿蘇）

○防護巡洋艦

パラーダ（Ｐａｌｌａｄａ）→津軽
ヴァリャーグ（Ｖａｒｙａｇ）→宗谷（仁川港内で自沈、後に浮揚）
ノヴィーク（Ｎｏｖｉｋ）→鈴谷（樺太まで逃走後、座礁し拿捕。日本では通報艦として使用）
○水雷砲艦
ガイダマーク（Ｇａｙｄａｍａｋ）→敷波
フサードニク（Ｖｓａｄｎｉｋ）→巻雲
○駆逐艦
シーリヌイ（Ｓｉｌ'ｎｕｉｙ）→文月（芝罘（チーフー）に逃走したのを鹵獲）
レシーテリヌイ（Ｒｅｓｈｉｔｅｌ'ｎｕｉｙ）→山彦（当初は暁と命名）

一方、日本海海戦を経て鹵獲されたものは、徹底的に壊滅した為か、僅かばかりの数でしかない。
○戦艦
オリョール（Ｏｒｅｌ）→石見
○海防戦艦
インペラトール・ニコライ一世（Ｉｍｐｅｒａｔｏｒ　Ｎｉｋｏｌａｉ　？）→壱岐
ゲネラル・アドミラル・アプラクシン（Ｇｅｎｅｒａｌ　Ａｄｍｉｒａｌ　Ａｐｒａｋｓｉｎ）→沖島
アドミラル・セニャーウィン（Ａｄｍｉｒａｌ　Ｓｅｎｉａｖｉｎ）→貝島
○駆逐艦
ベドヴイ（Ｂｅｄｏｖｕｉｙ）→皐月

「ポルタワ、セヴァストポリの姉妹、ペレスヴェート、ポベーダの姉妹、この四人は確実みたいですね。
他に巡洋艦も含まれるのかもしれませんね」

そう言ってツェザレーヴィチは、装甲巡洋艦の艦魂であるバヤーンを見た。
バヤーンはきまり悪そうに、あみだに被っていた帽子を目深に被り直した。

「ああ、私の聞いたところでも似た様な状況だ」

レトヴィザンも頷く。

「良い事ではないですか。生まれた国に帰れるのですよ」
「本当にそう思っているのか？　ツェザ」
「レト、それはどういう事ですか？」

ツェザレーヴィチはレトヴィザンを睨む。
レトヴィザンもツェザレーヴィチを睨む。
お互い相手の睨み合いを続けた後、レトヴィザンは溜息を一つ吐き、語り始めた。

「あの戦いから１０年経つ。当時ロシア最強・最精鋭だった私やお前も、弩級どころか超弩級戦艦まで現れる
今の時代となっては、すっかり旧式になっちまった。そんな中、彼女たちを、しかも大戦の最中に帰して
何になるというんだ？
ポルタワたちは私たちよりも旧式艦だ。サーシャたちは・・・ポペーダが自嘲していたが、戦艦と巡洋艦の
中間的存在で、主砲も２５．４ｃｍしかなく、見劣りしているのは明白だ。
そんな彼女たちが祖国（ロシア）に帰ったって、役立たずな上、不幸な顛末を迎えるのは解りきっているんだ。

それどころか、あの戦い以降、祖国(ロシア)は大国にあるまじき安定さを欠け続けているのは、お前の耳にも入っていると思う。それでもお前は良い事だと思えるのか？」

レトヴィザンに言われて、ツェザレーヴィチはしばらく無言で刀身を磨く作業を続けていた。
やがて呟く様にぽつりと言った。

「ええ、かっての敵だった者たちと共に辱めを遭う様に過し、最後はその者たちの砲弾で見せしめの様に沈(殺)められるのに較べれば、ずっとましですよ・・・」

結局、「丹後(ポルタワ)」「但馬(セヴァストポリ)」「因幡(ペレスヴェート)」「周防(ポベーダ)」、それに「津軽(パラーダ)」。
この四戦艦一巡洋艦をロシアに返還するという発表があったのは、それからしばらく経ってからだった。

第１０話　皇太子の憂鬱（後書き）

艦魂たちと作者のダベりコーナー（３）

「こらっ！　作者！」
「何だよ摂津」
「今度こそ私やお姉ちゃんの出撃だと思ってたら違うじゃないか！
　しかも私たちが全然出てない！」
「ああ、そうだな。
実は米問屋のひ孫先生の「日本海海戦まで－バルチック艦隊の精霊たち－」を拝読させていただいたのだけど、
『ツェザ　可愛いよ　ツェザ』で、ウラーーーーーーーーーー！な状態になったもので、
時系列的にも彼女たち前弩級戦艦が、まだ間に合いそうな事もあって、一話分使って書いてみた次第」
「そんな勝手な事をして、米問屋先生に了解を得ているのですか？」
「いや、まだ。先生も学業が忙しいみたいだし・・・駄目だったら削除するしかないね」
「まったく・・・無駄な事をするのですね」
「無駄じゃないぞ。お前たちが欧州に行っている間、本国ではどんな出来事があったのか描けば、
物語に厚みが出るというもんだ」
「直ぐに自分の行いを正当化する作者様の悪い癖ですよ。
それに厚みが出るといっても、元々ペラペラな物語。数ミクロン程度ではないですか」
「河内、お前って、かなりキツい事をチクチクと言うんだな・・・」
「そうですか？　私は事実を申しているだけですが」
「ねぇねぇ作者！」
「どうした？　摂津」

「ツェザレーヴィチさんて、米問屋先生の原作では、もっと明るくて美人でちょっと能天気で、
まるで私みたいな人だよね？　なのに、この話では随分と陰険な人に思えちゃうんだけど・・・」
「お前よりずっと美人で、お前ほど能天気ではないと思うが、たしかにそうなんだよな・・・ｏｒｚ
これは私の文才が至らないところであって、大変申訳なく思っております」
「あら、作者様、素直に認めるのですね」
「認めますよ。そこまで卑屈ではないから」
「それは良い心掛けですね。ところで、史実とはいささか異なっている様ですが？」
「うん、本文中にも書いた通り、ツェザ嬢をはじめ日本に鹵獲された艦は史実より多くなっているし、
艦名も一部変更している」
「ペレスヴェート様やバヤーン様が変更されてますね」
「そう、日露戦争において海軍の活躍舞台は日本海だった為なのか、鹵獲した戦艦名は九州北部から
山陰にかけての日本海に面した旧国名を用いたらしいので、ツェザ嬢とか増えた分はそれに
当てはめてみたのだけど・・・」
「でも、相模は違うと・・・」
「自分の出身地は神奈川県だから嬉しいんだけど、何故これだけそうなの？となって・・・」
「そうですね。横須賀があるからでしょうか？」
「それは考えられるね。それから、横須賀といえば２００２年の海自発足５０周年式典を見に行ったら、
二代後（あと）のヴァリャーグが来ていたのを思い出したよ。ミサイルポッドどっちゃりのね」
「思いがけない繋がりがあるのですね」

「うん、繋がりといえば、お役御免となったレトヴィザンを砲撃処分する為に曳航したのが、
標的艦に改造された後の摂津だと言うし・・・」
「え？　私がレトヴィザンさんを処分する為にそんな事するの？
嫌だよ！絶対に！」
「そんな事言ったって、史実がそうだから仕方ないだろ」
「でも、この作品って架空戦記なんでしょ？　だったら変えてよ！」
「うん、まあそうなんだけど、どうしようかな？　フフフ・・・」
「標的艦になるのも嫌だからね！」
「だから、私の匙加減一つでだな・・・」
「あの・・・作者様・・・」
「急にどうした？　青い顔して・・・」
「そうだよ。お姉ちゃん、どうしたの？」
「史実通りだったら、私、ばばばばばばばばばばば、爆ち・・・・・・・・・・・・」
「おっと、それ以上言ったらネタバレになるから止そうな。どうしようかな？　史実通りにしちゃおうか？」
「お願いです。それだけは止めて下さい！」
（フフフ　これで河内も少しは大人しくなるだろう・・・でも私は、キャラを脅迫する様な卑屈な作者ではありませんよw）

「さて、話があらぬ方向に行ってしまったので、仕切り直しといこう」
「そうですね。そうしましょう。
では、さっきの続きですが、バヤーン様も阿蘇ではなくなってますね」
「うん、この「時空の波涛」シリーズでは、阿蘇という艦名の別の重要な艦が存在するので遠慮してもらった」
「そうなの？　どんな艦なの？　艦魂は？」
「それはここでは教えられないよ。

ただ、ちょっとネタバレすれば、この艦のおかげで旅順要塞攻略は行われてないんだ」
「だいたいは想像出来ますけどね」
「へえ～　お姉ちゃんは解るんだ・・・　私にはさっぱりだよ。後で私にも教えてね！」
「ふふふ、どうしようかな？　作者様、そろそろ今回もお開きにしては？」
「そうだな。では、読者のみなさん、次回もお楽しみに！」
「バイバ～イ！　次回は私たち、がんばるからね！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4492n/

時空の波涛・外伝 －欧州に翔きし姉妹－

2011年8月31日12時48分発行